

ISSN 2758-7363

かなざわ食マネジメント専門職大学

紀要

第3号

2025年

【目 次】

食文化の変容かブームなのか—

米国日本の緑茶の需要の背景と今後の展開に関する考察

清水 恭彦 (1)

W. A. Paton 理論における会計構造論の意味

——企業会計の静態的分析の一考察——

木戸田 力 (15)

食品業界のビジネス人材養成機関としての「かなざわ食マネ

ジメント専門職大学」の可能性に関する一考察

—インバウンド市場を含めたグローバル視点の重要性

清水 恭彦 (25)

地域記号化体系の普遍的な生成的性質

—— 記号情報論確立の基礎として ——

古賀 弘毅 ・ 木戸田 力 (32)

食文化の変容かブームなのかー

米国における日本の緑茶の需要の背景に関する考察

清水 恭彦*

概要

日本からの緑茶の海外輸出、緑茶の海外需要が近年、増加している。財務省の統計によれば令和4年(2022年)の輸出高は200億円を超えとなる219億円となったかと思えば、翌年の令和5年(2023年)には一気に33%増の292億円まで増大し、令和6年はさらに前年の25%増の364億円となった。2019年には146億円であったので4年で倍増、5年で2.5倍となったのである。農水省は2025年の輸出額目標として312億円を掲げていたが、前倒しで達成となった。また国内のインバウンド市場でも抹茶は大人気で宇治のお茶屋では店頭に並べても、すぐに売り切れるという。

このように海外需要が急拡大している日本茶であるが、なぜ急激にここまで増大してきたのか。そもそも食品は嗜好性が高くグローバル化した世界においても食文化はあまり影響を受けないといわれている。事実、米国では無糖の緑茶を好む人は少なかった。このようなことから現在、米国に米国を提供している日本の企業はどのようなところがあり、そして、日本の緑茶、抹茶が好まれる傾向は今後も続くのかについて考察する。

グローバル化する世界においてもローカルである食文化

パンカジュ・ゲマワット (2007)ⁱのCAGEのフレームワークは、レビット(1983)ⁱⁱがその昔

* しみず やすひこ かなざわ食マネジメント専門職大学フードサービスマネジメント学部 教授

に予言したような世界標準な世界になっておらず、実際はセミ グローバルだということを説明する際に使われる国際経営、グローバルマーケティングの世界ではものであるが、このCAGE理論のフレームワークは、国家間には、文化（C）（宗教、民族、言語、社会規範等）、政治（A）（法的、制度的、政治規制等）、地理（G）（物理的隔たり、時差、気候、物流コスト等）、経済（E）（労働コスト、資本コスト、所得水準、インフラ等）の差異がある、このため完全なグローバルな世界は生まれえないというものである。特に食品は Culture-specific な製品であるといい、事実、私たちの食文化、食の嗜好は地域によって大きく違っている。そのため食品の海外輸出は電子部品や工作機械などと違って簡単ではないといわれている。ジャン・クロード・ウズニエとジュリー・アン・リー(2001)ⁱⁱⁱも食習慣の文化的多様性を指摘しており「食習慣は、食べ物や飲み物を購入し、調理し、味わい、それらを批判することさえ含む、すべての過程としてとらえなくてはならない」という。そして、小田部・ヘルゼン(2001)^{iv}は、嗜好の地域性が強い食品や飲料はグローバルブランドよりもローカルブランドが成功しやすいと指摘し、食品ビジネスの海外進出の難しさを主張する。そのような中で抹茶を中心とした日本の緑茶が特にこの10年くらいの間に急上昇した理由はなんであるのか。あるにはレビットの言葉が正しくなってきたのか？これを考えていく。

食分野でも始まった海外市場への輸出戦略と緑茶の状況

第二次安倍内閣は2013年に「日本再興戦略」を閣議決定し、日本の経済成長を定めた。この中には従来の日本の輸出品にはあまり含まれることがなかった分野がいくつか選ばれた。かつては鉄鋼、電子部品、自動車等が外貨を稼ぐ中心品目であったが、アニメを中とするエンタメ分野やかわいいファッションで世界的な影響力も出てきたファッション分野などと並んで農産水産物や加工食品も国家的重要度の高い輸出品として選ばれたのである。最初の二分野は「クールジャパン」戦略となり、主に経産省が支援する分野となったが、当然、食品の分野は基本的に農林水産省の担当となり、2013年8月に同省は「農林水産物・食品の国別・品目別輸出戦略」を発表。具体的に輸出拡大を目指す品目と輸出対象国を決めた。その輸出額は2013年には約5,500億円であったが、2020年には9,860億円と約1兆円まで増大し、2024年は1兆5,000億となった。しかし2025年の目標額は2兆円であり、その最終目標額は2030年に5兆円となっている。ここからなにをどれだけ増やしていけるのかが問題である。2024年については、カテゴリー別では「ソース混合調味料」が増加額では+86億円と最大の増加額であり、2013年度の約倍の輸出額となった。これは日本のカレー人気などを背景としたカレールーやソース、マヨネーズなどの合計である。次に抹茶を中心とする緑茶が+72億円と2番目に大きい額となったが、増加率ではソース混合調味料が+16%であるのに対して緑茶は+25%となっており今後のさらなる成長が期待できそうである。ちなみに世界では多くの食品展示会が開催されておりJETROや農水省もこれらに出展を希望する日本の食品企業などを支援するが、出展枠には限りがあり、例えば毎年2月に中東のド

バイで開催されるガルフードはもっとも出展希望が多い展示会であるが、結果的に政府は支援企業を今後、海外市場での需要が増える可能性が高いと思われるものを優先して支援をすすとしている^v。2024年においては農林水産物・食品のうち主な加工食品と緑茶の輸出額は次の通りである。

品目	金額（百万円）	前年同月比（%）
ウイスキー	43,651	▲ 12.8
日本酒	43,469	+5.9
ソース混合調味料	62,991	+15.9
清涼飲料水	57,433	+7.0
緑茶	36,380	+24.6
菓子（米菓を除く）	34,372	+11.9

出展：農林水産省 輸出・国際局 2024年の農林水産物・食品輸出額より筆者作成^{vi}

上の内容を見ると近年、トップの輸出額、伸び率であったウイスキーの中国向け需要が中国経済の減速によりマイナスとなったのが目を引くが、これは、もともと中国向け輸出は欧米における日本ウイスキー人気に関連した、いわばバブル需要であり本質的で安定的な需要は欧米であり、ある意味、本来の姿になったといえる。そして次に目を引くのが何より緑茶の伸び率である。また上記の表の品目は緑茶のみ「農産物」としてカテゴライズされており他は「加工食品」となっているが、実際は海外の日本食レストランなど向けに輸出されている「清涼飲料水」の中にも緑茶が含まれていることを考慮すれば、いかに緑茶が人気なのかが理解できる。ただ次項で見るように近年の緑茶の上を見ていると、あまりの伸び率にむしろ、これが一過性のものでないのかとの不安も感じてしまう。前述したように飲食の嗜好性は各国、各地域で長い歴史の中で培われ、共有されてきた文化でもあり、いままで人気がなかったものが、これだけ急激に需要が増えるというのはある意味不思議である。もっともゲマワットは現代はローカルの時代とは言っていない。セミ・グローバルという。つまり半分はグローバルというのである。世界的なベストセラーとなった「フラット化する世界 (The world is flat)」を書いたジャーナリストのフリーマン^{vii}もインターネットが登場して情報が簡単に入るようになった世界では人々の嗜好も価値観も共通化してきているという。特に米国は自由にネット上に様々な情報が飛び交い、SNSで情報を発信し多くのフォロワーに影響を与えるインフルエンサーと呼ばれるような人も数多く出てきている。そうであれば抹茶の人気は単なる一時的なブームではないといえる可能性もあるといえる。

緑茶の輸出の推移

日本の緑茶の輸出状況全般について見てみる。

【緑茶の輸出実績（世界）】



【緑茶の輸出価格の推移】

単位：円/kg

H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
2,812	3,093	3,005	2,867	3,069	3,304	3,494	3,851

米国の内訳分

【緑茶の輸出実績（米国向け）】



出典：財務省貿易統計 (<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/cha/attach/pdf/ocha-76.pdf>)

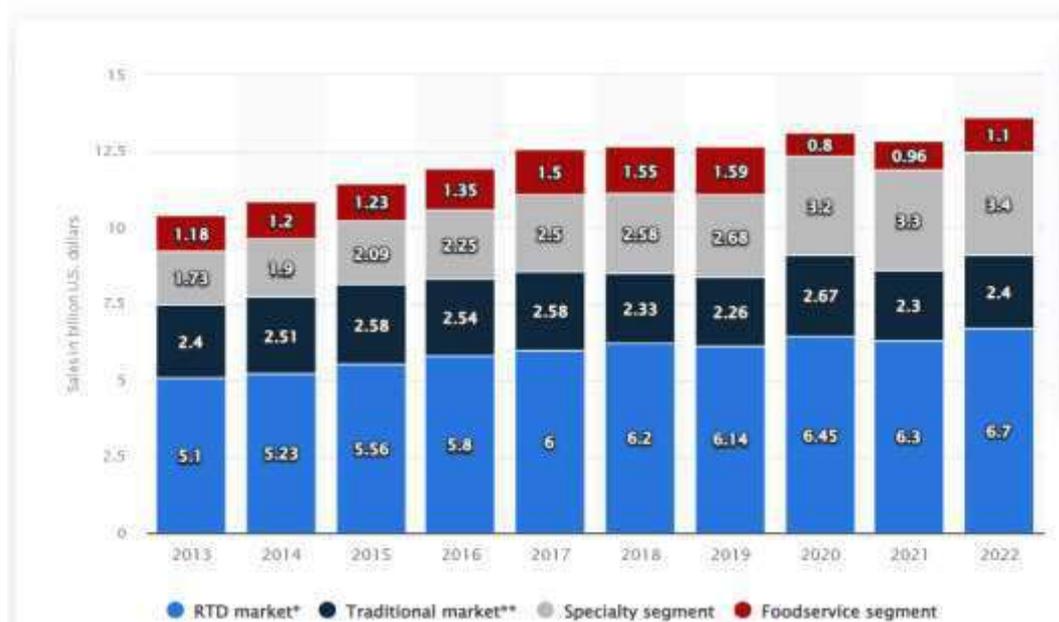
上記のグラフは令和5年までのものであるが、ここからわかるように現在、日本の緑茶の半分以上、輸出金額では約54%は米国1国で占められている。そして、米国への輸出高は6-7年の間に一気に3倍となっている。もっとも抹茶を中心として急激に日本の緑茶の需要が高まってきているのは、欧州のドイツ、そしてアジアでもシンガポールなどをも同様である。その意味では欧州もアジアも米国以上のポテンシャルがあるともいえるが、とりあえずは米国における日本の緑茶の需要がどのように広がってきたのかを、まずは米国市場におけるお茶の市場の状況からみていく。

米国のお茶市場の規模

米国茶業協会 (Tea Association of the U.S.A. Inc.) のHP^{viii}の中の「2024 Tea Fact Sheet」によれば、2023年、米国市場では860億杯のお茶が消費されたという。但し、その86%は紅茶であり、緑茶は13.6%だという(残りはウーロン茶等)。また、その緑茶も圧倒的に中国産のものが多く、飲まれ方については、約8割はアイスで飲まれているとしている。市場規模とその形状については米国 Statistic 社の資料によれば、スーパーなどで売られている Ready to Drink (RTD) が全体の半数近くを占めている。

Market size of tea in the United States from 2013 to 2022

(in billion U.S. dollars)



出典: Statistics 社 米国茶市場の推移(2023 May data release wholesale value)

<https://www.statista.com/statistics/258565/us-wholesale-tea-sales-by-market-segment/>

日本の抹茶需要が高まった経緯

このようにコーヒーはいうまでもなく紅茶と比べても緑茶の需要ははるかに小さく、その緑茶も中国産が主流の米国において、どのように日本の抹茶は受け入れられてきたのかを見てみたい。最初のきっかけは米国、特に西のカリフォルニア州や東のニューヨーク州やシカゴ、ボストンなどを中心に1995～2000年くらいから高まってきた健康志向がある。これは健康食としての日本食への関心ともなり寿司レストランや他の日本食レストランの数もこれらの地域を中心に増え続け1992年には全米で3,000店程度だったのが2000年には倍の約6,000店にまで増え、さらに2010年には14,000店を超え、ついに2022年には2万超えとなった^{ix}。そして、この日本食ブームは日本茶、特に抹茶への関心ともなり特に、抹茶の抗酸化作用やカフェインの特性が注目され、そこにスーパーフードブーム^xの影響もあり、抹茶は「健康的な飲み物」としてアメリカの市場に広まったといわれる。それに加えスターバックスが2006年に「抹茶ラテ」を発売したことも、抹茶人気を加速させた重要な要因だといわれている。特にカリフォルニアのロスアンゼルス、サンフランシスコといったアジア系が多く健康に対する意識も高い地域では、多くのカフェでの定番の人気商品となっており、その人気はニューヨークなどの東部地域でも同様である。また2023年の記事ではあるが、この抹茶ブームにはSNSで活躍するインフルエンサーの存在があり、2023年7月現在、YouTubeで1,200万人の登録者とInstagramで1,590万人のフォロワー数を持つエマ・チェンバレンのようなインフルエンサーは、頻繁に抹茶を取り上げており、彼女が抹茶ドリンクを楽しむある動画は1,000万回再生を記録しているという^{xi}。しかし、ここで一点、強調すべきことは抹茶の人気はスーパーフードとしてのその成分であり、多くの抹茶は抹茶単体よりもミルク、ココナッツミルクなどで割ったものや、菓子などの材料としての人気であり、日本の伝統的茶道に対する関心の高まりなどによるものではないということである。

抹茶パウダーを中心とした海外 B2B 市場への販路を広げる中堅企業―(株)あいや

ここで改めて、米国市場における抹茶が受け入れられるようになった経緯を見てみたい。スーパーフードブームによる影響といいながら、当初、スーパーフードとして取り上げられていたのは、マカ、クコの実（ゴジベリー）、カカオ、ココナッツ、アサイー、カムカム、ブロッコリースーパースプラウトや、身近な果物や野菜（りんごやニンジン）を丸ごと食べることであり、いきなり抹茶が代表的なスーパーフードとして注目されたわけではない。2024年に伊藤園は米国メジャーリーグのスーパースターでロサンジェルス・ドジャースの大谷翔平をブランドアンバサダーにしてB2C市場にRTD（Ready-to-Drink）の「お〜い、お茶」を中心に販売を広げることをプレス発表した¹²が、それより以前に抹茶を米国市場に浸透させるのに貢献した企業がいたようである。

愛知県西尾市に本社を持つ中堅の製茶企業の「株式会社あいや」は主に抹茶パウダーをカフェの抹茶ラテや製菓向けの原料として、地道な営業活動を米国市場中心に行ってきた。現在では抹茶輸出のトップを走る企業であり、米国市場に抹茶製品を浸透させた功労者だと

いわれている。23年度、日本の抹茶の輸出額は292億円であることは冒頭に記載したが、あいやの24年1月の売上は104億であり、大雑把には日本の緑茶の輸出額の約3分の1は、あいやによるものである。以下、あいやの歴史をそのHP^{xii}を参考に記載する。

あいやは1888年に杉田愛次郎が茶と藍を取り扱う杉田商店を創業したところから始まる。その後、1922年に合資会社あいやとして、商いを茶業に一本化、特にお茶の中でも抹茶用の碾茶専門の商いとした。なお西尾の地域全体が日本の中でも碾茶を専門とする製茶会社が多く、あいやはその地域の出世頭ともいえる企業といえる。その後、有限会社、株式会社と成長していく一方で、1960年ごろに日本の製茶会社としては初めて抹茶を食品加工原料として販路を拡大することに成功し、1970年代にはお茶の有機栽培に初めて成功させ、1983年に初の海外輸出となる北米への輸出を開始した。その後は2001年にAIYA Americaをニューヨークに（2004年にL.A.に移転）設立し、翌2002年にはUS有機認証、欧州有機認証、コーシャ認定を取得し、2003年にウィーンに（2008年にハンブルクに移転）AIYA Europe GmbH設立。2005年に中国の浙江省（2013年に上海に移転）にも現地法人設立、そして2017年にバンコクにAIYA Thailand設立と続き2016年は抹茶の売上の30%程度だった海外比率は2020年にはついに国外の抹茶の売上は国内を上回り、直近の2024年1月期では売上104億円の65%は海外からであるという。海外の売上の約6割は北米というので約40億円が米国市場からとなる。

それでは、あいや社の海外市場開拓はどのように行われ行ったのであろうか。

2016年に社長の杉田芳男氏（当時）はDigima（出島）の取材^{xiii}で1983年からの米国への輸出は当初から飲用ではなく食品市場にターゲットを定めたものの、あまり売れず、2001年の米国法人設立後も思わしくなかったが米国法人を立ち上げL.A.に移転して抹茶単体ではなく、アイスクリームに混ぜて抹茶アイスとして抹茶の使用を提案したところ人気が出始め、その後はチョコレートやクッキーに広げていったところ売上が拡大し始めてリーマンショックの時は下がったものの、その前後は年間約2億円の売上までなったという。

2022年12月JETROの取材では「輸出がとりわけ好調なのは、欧米向けの食品加工用抹茶で（略）これまでは、飲料や菓子を生産するメーカー向け販売が中心だったが、現在、市場が特に伸びているのはフードサービスであり、なかでもカフェ・レストラン向けの需要」と杉田武男代表取締役社長はコメントしている^{xiv}。

このことから現在の米国市場における抹茶の人気は、あいや社の地道な努力、そこに2006年のスターバックスの抹茶ラテなどの発売もあり定着し、その後、健康ブーム、それを盛り立てる人気インフルエンサーなどの存在もあり、特にロサンゼルスやサンフランシスコを中心とする西部地区、シカゴ、ニューヨークを中心とする東部地区を核に全米で定番的人气食材、商品となったといえそうである。しかりやはり、改めて抹茶の人気は味や香りというより、その成分、つまり健康食品としての需要であり、日本のお茶の文化が受けて入れられたものではないとあいやの杉田社長はいう^{xv}。

その他の抹茶関連業者の動向

上述のあいや社の努力もあり、お点前に代表される日本の抹茶文化の浸透はまだまでであるが食材として抹茶は米国市場に根付いたといえるだろう。そしてあいやの後を追うように静岡、鹿児島などの抹茶業者も米国を中心とする抹茶の輸出に乗り出し始めている。農林水産省も前述の「農林水産物・食品の輸出拡大実行戦略」にもとづいて、主として輸出向けの生産を行う輸出産地をリスト化し、輸出産地の形成に必要な施設整備等を重点的に支援しており、鹿児島の緑茶は欧米向けを意識しており、全国の有機栽培されている緑茶の約半分が鹿児島となっている。静岡も静岡県茶商工業協同組合が中心となり、地域が一体となり海外向けのお茶を生産している。例えば 1917 年に創業のハラダ製茶は 2012 年にシンガポール駐在員事務所を開設し 2015 年に現地法人開設したが 2017 年には米国法人開設とアジアと北米を中心に海外市場の開拓も海外の緑茶ブームに合わせるかのように進めている^{xvi}

緑茶ブームの先駆け、伊藤園の「お〜いお茶」の歩みと今後の展開方針

ここまで見てきたように米国における日本の緑茶、抹茶は健康ブーム、スーパーフードブームの中でスターバックスでの抹茶ラテの販売開始やあいや社による食品加工用の原料としての営業によって販売を増やしてきたといえるが、次に国内緑茶最大手の伊藤園についてみる。伊藤園も実は 20 年以上前から米国に進出しており日本からの輸出ではなく現地製造も行っている。

株式会社伊藤園の HP によれば、2024 年 4 月期の伊藤園の売上高は 4,538 億円であり、売り上げの中心は緑茶部門では販売数量では国内シェア約 40%のトップブランドとなっている「お〜いお茶」である。また全売上高に占める海外比率は 11%となっている。その歩みをみると、伊藤園は 1966 年に前身となる「フロンティア製茶株式会社」を設立し、三年後の 1969 年に商号を「株式会社伊藤園」に変更、1985 年に「缶入り煎茶」の販売を開始後、1989 年に今の「お〜いお茶」に名称を変更し、その後、売上高は 1990 年に 500 億円を突破、1995 年に 1000 億円突破、2001 年に 2000 億円突破、2007 年に 3000 億円突破と順調に成長してきている。

海外拠点については、1987 年に初の海外拠点となる「ITO EN(Hawaii) LLC.」をハワイに、そして 2001 年には「ITO EN(North America) INC.」を米国のニューヨークに設立 (2021 年にテキサス州に移転)。その後、1994 年に「ITO EN Australia PYT.LTD.」をオーストラリア、そして寧波舜伊茶業有限公司を中国の寧波に、2012 年には ITO EN Asia Pacific Holdings Pte., Ltd」をシンガポール、「伊藤園飲料 (上海) 有限公司」を上海に設立。翌 2013 年には「ITO EN(Thailand) Co., Ltd.」をタイのバンコクに設立。そして 2024 年には「ITO EN Vietnam Co., Ltd.」をベトナムのホーチミンに設立後、欧州初となる「ITO EN Europe GmbH」をドイツのデュセルドルフに設立している。そして 2025 年 4 月期からの中期計画では、重点戦略のひとつとして、「お〜いお茶のグローバル化」を掲げ、世界 60ヶ

国以上でのお茶製品の販売を目標としている。

実際、日本の緑茶は抹茶を中心に世界的に人気となってきているが、現時点では日本の緑茶の最大の消費先は米国である。もっとも、その多くは、あいや社が提供するような食品加工用や抹茶ラテ用の粉茶が中心となっている。そして先にみたように米国市場における緑茶全体の需要は、コーヒーはもちろん、紅茶と比べてもかなり少ない。その意味では、アジア、欧州と比べてもお茶を飲む文化が根づいていない米国で緑茶が売れているというのはある意味不思議なことでもある。しかし、そのような米国でも健康志向が高く、相対的に高収入な層を中心に無糖の緑茶が浸透する先駆けとなったのが伊藤園の「お〜いお茶」といわれている。その伊藤園は 2024 年 4 月 30 日付で大谷翔平との複数年グローバル契約を結んだと伊藤園のプレスリリースを発表したが、実は伊藤園の米国市場への進出は、もう四半世紀近く前である。その意味でまずは伊藤園の米国における経緯を簡単に見てゆきたい。

伊藤園の米国進出

伊藤園の本格的な米国市場への進出は 2001 年の ITO EN(North America) INC. の設立と同時に始まったといえる。1997 年に設立した ITO EN(Hawaii) LLC. は、原材料の調達と製造であり販売までは考えていなかったという^{xvii}。2001 年の時点では無糖の緑茶に対する需要は米国では、ほぼ皆無であり、まずは健康意識も所得も高い人々が多く住むニューヨークのマンハッタン的高级住宅街にアンテナショップを開設して、緑茶の紹介や日本の文化をすることから始めたという。その意味もありパッケージにはあえて日本語も記載して日本の製品であることを強調させた。主力商品である「お〜い、お茶」の 1 本の価格は健康意識が高い富裕層を対象としたこともあり、コカ・コーラなどの製品の 2-2.5 倍に設定。そして、このようなアンテナショップの運営や緑茶の啓蒙活動を 10 年間以上に渡って続けた。またシリコンバレーの IT 企業のカフェテリアなどへの営業活動も行い、その際にも日本茶の特徴や無糖、ノンカロリーであり、カテキンという抗酸化作用、抗ウイルス作用、コレステロールを下げて、血糖値の上昇も抑える作用もあることなどを丁寧に説明し回った^{xviii}。その一方で現地の嗜好、価格に合わせた有糖の紅茶飲料なども「TEA' S TEA」の米国専用のブランドを開発し提供を行った。

その結果、当初は苦戦した伊藤園のお茶ビジネスも日本食の人気に伴ってカルフォルニア州やニューヨーク州という健康志向が高い地域を中心に人気上がり始めたという。先述したように 2022 年の JETRO の調査報告によれば、米国における日本食レストランの店数は 2005 年に 9,182 店、2010 年に 14,129 店であり、その後 2013 年 12 月には「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録され 2022 年では 23,064 店^{xix}となっている。実際、伊藤園の北米事業は 2007 年度に前年 2006 年度の 1180 万ドルから一気に約 4 倍の 4030 万ドルとなり、2010 年には黒字化を達成している。その後、伊藤園は「お〜いお茶」のブランドで本格的な日本のお茶メーカーであるということに加えて、先述の「TEA' S TEA」のブランドで今度は米国市場に合わせた製品の拡充にも力を入れるようになり、そして直近の 2024 年 4 月

において北米事業は海外売上げ約 530 億円の約 9 割近い約 470 億円程度まで成長してきている^{xx}。そして 2024 年 4 月にはドジャースの大谷翔平選手とグローバル複数年契約も結び、より海外市場の開拓を進めることを表明したというわけである。もっとも、伊藤園では大谷翔平という超大物スターを起用しても「食文化」を変えるのはそう簡単ではないと考えているという^{xxi}。要は、やはり無糖の緑茶の味や香りを好んでいるのはまだ一部の消費者で多くは抹茶ラテ、抹茶アイス、抹茶ケーキのような形での消費が主流である。実は伊藤園の米国の売上の三割以上が緑茶系製品ではなく、2015 年に買収したコーヒー豆の会社であるという。そうであれば 2001 年からスタートした米国市場の開拓における緑茶の売上げは現在、約 300 億程度でそれは日本の 7%程度ということになる。米国市場には伊藤園のような無糖の緑茶を販売する強豪となるような企業も存在しないと思われるので、当初、ターゲットとしたアジア系が相対的に多いカルフォルニア、そしてシリコンバレーの IT 企業、ニューヨークの金融街に勤める人達のような健康志向で高収入の層には一定の支持を得ているといえそうであるが、コーヒーや紅茶のように米国市場でも完全に定着した飲み物とまではなっていないといえるだろう。これは見方を変えれば、今後、米国において日本食、すし店がさらに一般化すれば緑茶も米国市場に定着する可能性は大きいということになり、事実、着実に緑茶の市場は拡大してきてはいる。しかしながら、米国市場に限っていえば、いまの市場が求めているのは「スーパーフード」として健康に貢献できる緑茶、抹茶であり、その具体的な一般的な摂取手段はストレートな消費ではなく、抹茶ラテや抹茶アイス、抹茶ケーキという方法が主流となっていることは事実である。その意味では「お〜いお茶」を中心にマーケティングを行うことは異教の地における一種の伝道活動であり、大谷翔平はさながら、その先頭を行く伝道師といえるのかもしれない。

米国市場における今後の日本の緑茶の進むべき方向

現在の米国市場において日系企業の緑茶の販売は大きく分けて二つのパターンがある。ひとつは、愛知県西尾市に本社を置く株式会社あいやに代表される食品加工用やラテ用の粉末抹茶を主とする B2B 市場を中心にする拡販活動であり、もうひとつは伊藤園に見られる日本と同じ無糖の緑茶「お〜いお茶」を主軸に大谷翔平のようなスーパースターをブランドアンバサダーとしての B2C 市場を中心にする拡販活動である。前者はスーパーフードとしての抹茶が認識された現時点では、広い意味でのプル型マーケティング、後者はプッシュ型マーケティングに近いといえる。そして前者のスタイルは中小企業にも可能であるが、後者は伊藤園のような資金力がある大手企業でないと難しいといえる。もちろん、あいやの杉田社長も米国駐在時はプッシュ型営業を行って、いまの地位を築いたといわれるかもしれないが、やはり米国の健康ブーム、スーパーフード食材への関心の増大も追い風になったのではないだろうか。それに対して伊藤園の場合は、抹茶よりも緑茶というべき「お〜いお茶」の営業を真正面から進めてきた。もちろん伊藤園にも日本食の人気、日本食レストランの増加という追い風に助けられてはいるだろう。しかし、いまの状況では、緑茶の拡販には、やは

り地道な営業とそれを継続する企業としての体力が、既に大きな需要があり、今もその人気が上昇してきている業務用の抹茶パウダーの営業より求められるだろう。ゲマワットらがいうように食習慣のような文化的な習慣は多少の広告宣伝や営業活動では簡単にかわらないことは明らかであろう。日本の政府からみれば、あいや社のような中堅の業務用原材料メーカーと伊藤園のようなB2C市場を対象にする大手企業が、それぞれバッティングをすることなく、むしろ、相互に協力しながら、それぞれの市場を開拓してもらうのが今後の進むべき方向となるのであろう。

国レベルの区分けでみる必要性の有無について

前段では、伊藤園には、これからも市場の開拓を進めていってもらうことを期待しながら、現状としては、いまの米国市場には伊藤園の提供する「お〜いお茶」を好む層はあまりいないということを述べた。そして、これは先のゲマワットの主張によれば、世界は完全なグローバル化ではなくセミ・グローバルであり、完全なグローバルとならない要因の一つは文化的な差異があるからであり、特に食文化の違いは大谷翔平の力をもってしても簡単には変えられないということになる。具体的にはゲマワットは日本の市場では、同じコカ・コーラ社の製品でも世界的に売れている製品であるコカ・コーラよりも綾鷹というブランドネームの緑茶の方が売れていることを例に、食文化のローカル性を示した。そして、この国別の文化的差異は有名なホフステッド(2001)^{xxvi}の「国民文化」としての国単位のフレームワークで考えることで一般的に定着してきたといえる。

しかし、同時に彼は同時に「職業文化」や「企業文化」が時として国籍の違いと同じ、あるいはそれ以上に影響を持つことも示唆し、職業に関しては、医師やエンジニアなどの間にそのような傾向があるといっている。カークマン、タラス、スティール(2016)^{xxvii}も「国」以上に価値観の共有が認められる「文化のくくり」が14も見つかったという。事実、マーケティングで国内市場の区分けを行う際でも、いまや、ライフスタイルなどを切り口にターゲットとすべき顧客を決めることは極めて一般的になっている。そう考えれば米国の人口3億4千万の国民の嗜好も一般的な嗜好の傾向はあるにして、実は、人によって、ばらばらであるともいえる。そう考えれば、いまは無糖の緑茶を好む割合は米国の人口の1割にも満たないとしても、将来的には、現在、既に健康志向であり、相対的に上位2割の高所得の人々がスーパーフードとしての日本の緑茶を好むだけでも約7000万人という十分に魅力的な市場となる可能性がある。思えば、以前は米国でも生魚を食べることになる寿司を好む人はごくわずかだった。それが、いまや寿司は米国でも大人気となっている。もっとも、寿司は大好きながら、多くはカリフォルニアロールのように、アボカドやカニカマなどの加熱済みの具材を使用した巻き寿司中心で生魚は食べられないという米国人は多い。しかし、米国で生寿司を好んで食べているのは一般には高い教育を受けた高所得で健康志向の層だといわれている。そうであれば日本の緑茶も着実に受け入れられていく可能性は高いといえるのではないかと。効能として、免疫力が強く、味に特別なクセもなく、しかもカロリー0なの

である。よって、伊藤園という大手企業が、大谷翔平という米国でも大人気の大スターを使って宣伝すれば、急激に売り上げはあがることはできるというような期待は現実的でないというだけで、徐々に緑茶もじつくりと米国市場に浸透するのを待てばいいのではないだろうか。実際、このことは米国市場全体では目立った動きはなくとも米国から日本を観光で訪れるインバウンドといわれる観光客の多くが無糖の緑茶や抹茶、高級なリーフティから手軽なティーバックの緑茶を自分や家族へのお土産として購入している^{xxviii}ことから期待できるのではないだろうか。

まとめ

国が目標とする農産水産物と加工食品の輸出高を2030年に5兆円を実現させる品目の有力候補として抹茶は確かに貢献度が高いといえる。そして市場としては、東南アジア、欧州への輸出も期待できるものの、なんとといっても現時点では米国が最大市場であることは間違いないであろう。但し、残念ながら2030年にむけての目標に関していえば、伊藤園などが提供する無糖の緑茶が柱となり日本の加工食品の輸出を牽引するとまではいかなそうである。当面は具体的な提供物は多くは加工原材料としての抹茶であり、提供者は静岡、三重（西尾）、京都（宇治）、鹿児島などの中堅企業であるといえる。そうであるなら国や県などの行政はその支援策をより一層充実させていく必要があるだろう。また抹茶が人気の理由は抹茶が持つ味や香りというよりも米国の健康ブームの中で「スーパーフード」の食材として認識されていることが最大の理由といえる可能性が高いと述べた。そうであれば、もしも抹茶に代わる他の食材を使った製品がスターバックスや他の影響力があるカフェチェーンなどから発売され、有名インフルエンサーがその食材を宣伝すれば、一気に抹茶の需要は下がる可能性もある。基本、食文化とは長い時間をかけて地域に根差しているものであり、突如として新規の食材が一時的なブームを超えて新たにその地域に定着するものになることは難しいといえるだろう。このような前提に立てば、これからが本当の勝負の時であり、緑茶はもちろん、抹茶ですら米国市場に根付くかはこれからの5-10年にかかっているといえる。緑茶自体は米国市場には、もともと中国産の方が多く輸出されている。そのことから国、県、各地域の緑茶協会などの取りまとめ組織、そして茶畑農家、製茶会社、販売会社とりまとめ「チーム・ジャパン」としての活動が決め手となると考える。いうまでもなく、日本の食品はいままで国内消費が中心であり、海外市場は意識せず何十年と事業を続けてきたというケースが多く、相対的に中小企業が多い業界である。かつてキリンホールディングスとサントリーホールディングスが一緒になるという話が2009年7月13日の日経新聞の一面に大きく載った。これは破談となり幻の経営統合となったが、この時、その売上高は両社の合計で約4兆円だったが、日経新聞をはじめ、多くのメディアはこれでやっと世界の市場で戦える規模の会社が食品業界から生まれると述べた。その意味では現在も日本の食品業界は中小企業の集まりといえる。この中小企業の集まりを世界市場を目指す集団にするというのが政府、具体的には農水省の目標なのである。そして何度も述べたように食文

化はまだまだローカルなのである。その意味でも、政府は、緑茶、抹茶の業界に細かな支援策を継続して行う一方、世界的な健康志向と日本食の人気の中で、緑茶の業界関係者は異文化市場の嗜好や各地域の流通構造などを理解していくことで、この商材を日本発の世界の食材として育てていくことが重要となるといえるだろう。

参考文献と参照情報

- i Ghemawat, P. (2007), *Redefining Global Strategy: Crossing Borders in a World where Differences Still Matter*, Harvard Business Press. 邦訳 パンカジュ・ゲマワット (2009) 『コークの味は国ごとに違うべきか』(望月衛訳) 文藝春秋社
- ii Levitt, T. (1983), “The Globalization of Markets,” *Harvard Business Review*, 61 (3), pp.92-102 邦訳 セオドア・レビット／有賀裕子、ダイヤモンドハーバードビジネスレビュー編集部訳(1983) 「地球市場は同質化へ向かう」、『ダイヤモンド ハーバードビジネスレビュー』1983年8-9号
- iii ジャン・クロード・ウズニエ、ジュリー・アン・リー (2001) 『異文化適応のマーケティング(原書第5版)』(小川孔輔、本間大一監訳) ピアソン桐原社 pp105
- iv Kotabe, M., & Helsen, K. (2001). *Global marketing management (2nd ed.)*. John Wiley & Sons. 邦訳 小田部正明、クリスチャン・ヘルゼン(2001) 『グローバル ビジネス戦略』(三浦俊彦 訳) 同文館
- v 具体的に農林水産省では例えば海外の食品展における政府の支援枠(Japan パビリオンなど)に多数の申し込みがあった場合、申し込み順ではなく海外における成長の可能性が高い順に支援企業を決めるとしている一筆者の農水省への電話による聞き取り調査等
- vi 農林水産省 2024年 農林水産物・食品 輸出額
https://www.maff.go.jp/j/press/yusyutu_kokusai/kikaku/attach/pdf/250204-1.pdf
- vii トーマス・フリーマン(2010) 伏見威蕃約『フラット化する世界—世界の大転換と人間の未来 上・下』日本経済新聞出版社
- viii 米国茶業協会 HP(2024.6.28 アクセス)
https://teausa.org//teausa/images/Tea_Association_Fact_Sheet_2024.pdf
- ix JETRO, “2022 年度 米国における日本食レストラン動向調査” 2023年3月
米国輸出支援プラットフォーム
https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2023/60677c66b878273d/pf_lag_2303.pdf?utm_source=chatgpt.com
- x 日本スーパーフード協会によると「スーパーフードが一般に広まったのは、アメリカの医師ステイブン・プラットの著書『スーパーフード処方箋～あなたの人生を変える14の食品』(2004年)によるところが大きい(略)スーパーフードを「健康によい栄養分を豊富に含みながら、多くは低カロリーである食品」と定義し、抗酸化作用が高いもの、老化や生活習慣病の予防によいもの、がんのリスクを遠ざけるものなどを紹介。(略)もう一冊、アメリカでスーパーフードのバイブルといえるのが、ロー・リビングフードのカリスマ、デイヴィ

ッド・ウォルフの『スーパーフード』（2009年）」という

(<https://www.superfoods.or.jp/>)。またロー・リビングフード (raw living food) とは、生または 48 度以下の低温調理で食べると健康に非常に有効な成分がとれるとされる食材で、これによりこれらの食材はスーパーフードとなる。

- xi マナミナ 2023年8月2日公開 <https://manamina.valuesccg.com/articles/2598>
- xii 株式会社あいや HP <https://www.matcha.co.jp/history/>
- xiii Dijima 出島 2016年4月21日 <https://www.digima-japan.com/jirei/china/matcha>
- xiv JETRO 地域分析レポート「抹茶製造のあいや (愛知県)、好調な海外販売が国内向けを上回る」2023年3月20日
https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2023/c296887d14688c8a.html?utm_source=chatgpt.com
- xv 創業130年の抹茶メーカーがお客様の半分を外国人にした海外展開の妙 | 飛び立て、世界へ! 中小企業の海外進出奮闘記 | ダイヤモンド・オンライン (diamond.jp) 2020.2.25 <https://diamond.jp/articles/-/229355?page=3>
- xvi ハラダ製茶 HP <https://harada-tea.co.jp/companyinfo/history/>
- xvii 日経 ESG ケーススタディ「伊藤園、ビジョン実現へ海外展開を強化」2023.5.11 の中国国際本部長の中嶋和彦氏のコメント
<https://project.nikkeibp.co.jp/ESG/atcl/column/00007/050800113/>
- xviii 大倉雄次郎 2012 「伊藤園の自然体経営 伝統と最新手法が織りなすイノベーション」、B&T ブックス
- xix JETRO, “2022 年度 米国における日本食レストラン動向調査” 2023 年 3 月
米国輸出支援プラットフォーム
- xx 但し、伊藤園は 2015 年に米国でコーヒー豆の販売などを手がける「ディスタント・ランズ・トレーディング」を買収する。この会社の売上が合併前の 2014 年 9 月期の売上高で 1 億 6112 万ドルー当時のレートで約 193 億円。但し 2025 年 3 月の本社国際営業部での筆者の聞き取り情報では緑茶の売上は上昇しているもののコーヒー豆の会社の売上は買収当時より落ちているとのこと。
- xxi 2024 年 2 月 14 日、伊藤園本社のマーケティング本部での筆者との面談時のコメント
- xxvi Hofstede, Geert (2001), *Culture's Consequence: International differences in world-related value* (2nd edition). Thousand Oaks: Sage 邦訳 ギャート・ホーフステッド/万世博、安藤文四郎監訳、春日雅司他約(1984) 『経営文化の国際比較—多国籍企業の中の国民性』産業能率大学出版部
- xxvii Kirkman, B., Taras, V., and Steel, P.(2016) Research: the biggest culture gaps are within countries, not between them. *Harvard Business Review* May18 2016 邦訳 カークマン、タラス、スティーブル ダイヤモンドハーバードビジネスレビュー編集部訳(2016) 「文化の違いは『国家間』より『国内』のほうが大きい」、『ダイヤモンド ハーバードビジネスレビュー』2016 年 8 月 13 日
- xxviii 2024 年 2 月 14 日、伊藤園本社のマーケティング本部での筆者との面談時のコメント

W.A.Paton 理論における会計構造論の意味

——企業会計の静態的分析の一考察——

木戸田 カ*

概要

企業会計は、基本的にメッセージの「受信者」である会計情報利用者中心のコミュニケーション・システムである。しかしながら、企業会計の基本型を理解するためには、社会・経済的状況が安定し、したがってメッセージの「発信者」と「受信者」の関係が安定している「コード依存」型のコミュニケーション・システムが重要である。このような企業会計に有効なのは、企業会計の「静態的分析」である。

コード依存型の企業会計システムでは、会計測定者の存在が重視され、彼の認識・測定行為もまた重視される。Paton 理論は、まさにこのような分析をおこなった業績であった。そこで、本稿では、企業会計の静態的分析という新たな視点から、Paton の「貸借対照表等式」と「会計構造論」の基本的性格および問題点を再吟味した。

* きどた つとむ かなざわ食マネジメント専門職大学フードサービスマネジメント学部 教授

本稿は、W. A. Paton の所説を手がかりとしながら、安定した社会・経済的状況下における企業会計システムがどのようなものかについて「静態的な分析」をおこなうことを課題としたい。その際には、記号論の視点から、静態的な分析の意義を明らかにしたい。その後、Paton 理論を手がかりとして、考察をすすめていきたい¹⁾。

I 企業会計の静態的分析

——安定した社会・経済状況下における企業会計との関連で——

1930年代から1940年代のアメリカでは、1929年の大恐慌からの立ち直りの時期ということもあり、社会・経済的状況は比較的安定していた。したがって、企業会計システムも比較的安定した状況におかれていた。この時期は、アメリカの社会・経済史において、例外的な期間といってもよい状況といえようか。

この時期においては、安定した社会・経済的状況に対応するために、メッセージの「発信者」たる会計測定者と「受信者」たる会計情報利用者の関係は比較的安定し、「コード依存」型のコミュニケーション・システムが成立していた、と理解される²⁾。

このような社会・経済的状況における企業会計を分析した優れた業績として、杉本[1991]の見解が掲記される³⁾。杉本氏は、企業会計を「会計測定システム」と「会計伝達システム」というサブ・システムに2大別され、会計測定を特に重視しながら、企業会計に関するシェーマを提示されていた。

杉本氏は、「会計測定システム」として、＜メッセージの発信者としての会計測定者が、企業の支配下に生じた経済事象（経済財の流れ）を、貨幣金額に着目して資金抽象化し、「資金の流れ」という抽象的な思考内容を形成し、それらを複式の勘定記録や決算財務諸表に記号化していく一連のシステム＞を提示している。

「会計伝達システム」としては、＜メッセージの受信者としての会計情報利用者が、監査された財務諸表を見て、投資意思決定などをおこない、現実投資やその引き上げなどの会計行動をおこなう一連のシステム＞を提示している。

企業会計システムにおける、これらの2つの基本的なサブ・システムは、それぞれ会計測定者や会計情報利用者などの「人間」によって担われており、彼らが会計測定の対象や会計伝達の対象をみて抽象的な思考内容を形成し、それぞれを決算財務諸表や投資意思決定などの（会計的）記号行為に変換していく一連のシステムとして理解される。

これらの企業会計システムでは、「会計的コード」が会計測定システムと会計伝達システムを結ぶ重要な要素として位置づけられていた。メッセージは、相手に知覚されるために「記号」により構成されると共に、そこには「意味作用」が必要とされることになる。

そして、これらの記号と意味はメッセージの発信者が恣意的に決めるのではなく、受信者との共通の決まりに従うことが必要とされる。この決まりが、「コード」である。

既述のように、1930年代から1940年代のアメリカでは、社会・経済的状況は比較的安定し、したがって企業会計も比較的安定した状況におかれていた。この時期には、メッセージの発信者たる会計測定者と受信者たる会計情報利用者の関係は安定し、コード依存のコミュニケーション・システムが成立していた。

このような状況において、企業会計において最も力を持っているのは、メッセージの発信者である会計測定者であったと理解される。換言すれば、このような状況では、「会計測定システム」が最も重視されたと理解される。杉本氏の一連の業績は、この会計測定に関する理論を確立した業績として評価されている。

では、企業会計が変動する今、このような企業会計の静態的状态を分析する意義はどこにあるであろうか。私見によれば、メッセージの発信者と受信者の関係が安定し、コード依存のコミュニケーション・システムが成り立つ状態こそが、「企業会計の基本的構造」を分析する際に最も適していると考えられるように思う。したがって、このような会計測定論は、企業会計の「記述理論」としての役割を担うものといえよう。

次項から分析をすすめていく W. A. Paton の見解は、このような時代のアメリカで脚光を浴びた理論であった。したがって、Paton 理論を分析することは、企業会計の基本的な姿を理解する際に、極めて重要な意味をもつと理解される。さらに、Paton 自身は、1940年代以降の業績において、資産評価基準として様々な時価を位置づける論考も発表している⁴⁾。彼のこのような学說的進展は、企業会計の静態分析を基礎として動態分析にすすんでいることを示していると理解されるように思われる。

II 静態的分析による企業会計システム

——Paton 理論を手がかりとして——

W. A. Paton は、Paton[1922]年において、会計人の存在を重視した「会計構造論」および「会計公準論 (The Postulates of Accounting)」を展開した論者として著名である。本節では、彼の会計構造論のエッセンスが凝集されている「会計公準論」を中心として、会計測定者の認識・測定および「会計構造論」の概要について論じていきたい。すなわち、この考察を通して、静態的分析による企業会計システムのあり方を論じていきたい。

1. 「企業実体」概念の認識

Paton は、自らの論理展開の基点として、企業会計の根底には、「企業実体 (business entity)」概念が存在していることを指摘している。すなわち、Hatfield などにより展開された「資本主理論 (proprietorship theory)」を、「他の重要な会計的分類——資産、負債、費用および収益——が、資本 (proprietorship) の単なるアクセサリーとしてのみ定義され

ている。」(Paton[1922], preface, xiii)として批判し、「企業実体」を基礎として、現実に即した新たな会計理論を展開することを主張している。

Paton は、「ここに、我々は、会計人の思考の根底に存在している概念を手にしており、この概念は、会計の全構造を支配している。」(Paton[1922], p. 17)と強調している。すなわち、会計人は、企業のすべての持分所有者の立場から、自らの職務を遂行していることが指摘されているのであり、したがって会計人の思考の根底には「企業実体」概念が存在していることが指摘されている、といえよう。

このように、会計人の思考の根底に「企業実体」概念が存在していることが明白に認識されることにより、 $資産 = 持分$ という会計等式を基礎に据えた新たな「会計測定論」の展開が可能となったと言えよう。

2. 資本主理論とは異なった、新たな経営過程の認識

「企業実体」概念の採用は、さらに資本主理論とは異なった新たな企業観の認識をすることを可能ならしめる。すなわち、会計の測定対象である企業の経営過程は、現実にそくした形で認識されることとなり、この認識の上に立ち、適切かつ明白な論理展開が可能になった、といえよう。

Paton は、1918 年に出版された R. A. Stevenson との共著(Paton & Stevenson[1918])の中で、以下のように述べている。

「営利企業は、種々の投資家から現金あるいは現金と同等物の総額の投資を受ける (secure)。これらの資金 (fund) は、工場、設備、および原材料に投下される。」さらに、労働者が雇用され、他の財貨および用役の獲得がなされる。これらの諸項目の購入は、当初の現金、および新しい資本あるいは掛 (on credit) によってなされる。やがて、製品は完成され、販売され、現金などの流動資産が獲得される。期中において、これらの販売から得られた資産の総額と、生産過程において費消された財の総額との差額、すなわち余剰分 (excess) が純収益 (net revenue) となる。これが、オーナーへの危険負担の報酬としての投資家への利益である。「諸勘定においては、この額は、費用 (expence) および収益 (revenue) 勘定の差額として表示されるのである。」(Paton and Stevenson[1918], p. 222)

すなわち、Paton 理論においては、企業は、利害関係者によって投下された資本によって運営されている、という認識を基礎として、これらの資本によって獲得された「経済財の流れ」が、現実世界における企業の経営過程として認識されている。

Paton[1922]においては、この見解はさらに発展させられ、企業の経営過程を三段階に区分する以下のような見解が表れるにいたる。

「ある営利企業において、「資産価値は三つの異なった段階を通過する。すなわち、(1)購入

あるいは獲得、(2)利用あるいは新たな形態への転換、(3)費用への転換あるいは生産物へ具現化されて企業から最終的に消滅していくこと、の三段階である。これらの三つの過程の間に存在する差異を注意深く観察しそこなうことが、会計の理論および実務における誤りの一般的な原因である。」(Paton[1922], pp. 159-160)

このように Paton は、1918 年に示されていた企業の現実世界における経営過程を、「経済財の流れ」とする認識を基礎として、それを資産の「価値の流れ」の三つの段階として把握している。ここにおいて、Paton が、企業の経営過程を、資産の「価値の流れ」という“フロー”概念との密接な関連のもとに理解しているのは、特に注目される。

Paton は、この叙述に続いて、発生原価について考察をしている。すなわち、(1)当初の収益に正当に○課しうる“資産の消耗”を含まない場合、(2)期間中に固定資産が獲得されても、その原価はその期の売上とはほとんどあるいはまったく関係しない場合、そして(3)当初の製造あるいは販売に利用されない原価は費用に含めるべきではない場合、という三つの場合を想定して考察をすすめ、発生原価は、費用とは非常に異なっていることを指摘している(p. 160)。

すなわち、Paton は、前述の経営過程を「注意深く観察」することにより、原価、費用、および収益といった会計的概念を、経営過程における「価値の流れ」と密接に関連させながら規定していることが理解される。このことは、Paton 理論を適切に理解する際の重要な“鍵”となりうる。

3. 会計測定者の認識・測定方法

Paton 理論は、このような「企業実体」概念および新たな経営過程の認識を基礎として、極めて個性的な会計測定論を展開していく。このような論理は、Paton[1922]の第 XX 章の「貸借対照表等式 (The Balance-sheet Equation)」の公準の中に凝縮されている。

この公準では、「資産(asset)」および「持分(equity)」という2つの会計的概念に言及されている。すなわち、この会計公準は、会計測定者としての「会計人」が、企業の経済事象を認識・測定し、複式の勘定記録ないし決算財務諸表を作成する際に、資産＝持分という会計等式を前提として会計実務を遂行していることに論及している(木戸田[1985]参照)。

私は、前項にて、企業会計では、社会・経済的状況が安定し、したがってメッセージの発信者である会計測定者と受信者である会計情報利用者の関係が安定したコード依存型のコミュニケーション・システムが重要であることを指摘した。このような企業会計には、静態的分析が必要であることも強調した。

コード依存型の企業会計システムでは、会計測定者の存在が重視され、彼の認識・測定行為もまた重視される。このようなシステムでは、企業会計の静態的分析が適切であると理解される。Paton 理論は、まさにこのような分析をおこなった業績として評価しうる

(ただし、1940年代以降のPaton理論では、様々な資産評価基準の採用を基軸として、企業会計の動態的分析への理論的發展が図られている)。

以下、本節では、木戸田[1985]を基礎としながらも、企業会計の静態的分析という新たな視点からPatonの「貸借対照表等式」の基本的性格および問題点を再吟味していきたい。Patonは、この会計公準の内容を詳述するに際して、まずもって会計人が前提としている「特殊かつ技術的な公準」であること、そしてこの公準の内容を明確にするために、Paton[1922]の第Ⅱ章「基本的分類」の議論が再論されることを指摘している (p. 481)。

このPatonの指摘では、以下の2つのことが留意される。

すなわち、その第一は、Patonはこの公準を「特殊かつ技術的な公準」であるとする文言に関して見いだされる。この文言は、表面的に解すれば、「貸借対照表等式」の公準とは単に複式簿記の記帳技術的側面にのみ関連している企業会計に特有の公準であると理解される。しかし、彼は、この文言をより深い意味に用いている。

すなわち、彼は会計測定プロセスに最も着目し、そこで行われる認識・測定方法について言及していると理解される。彼は、メッセージの発信者である会計測定者の存在および認識・測定方法を重視しており、彼の分析方法は静態的分析であると理解される。

上記のPatonの指摘で留意される第2は、「貸借対照表等式」の公準の内容は、Paton[1922]の第Ⅱ章との密接な関連のもとに叙述されていることである。すなわち、上記のPatonの見解は、「貸借対照表等式」の公準は彼の展開した会計測定論と同様に、現実の企業会計の測定実務から帰納されたものであるために、これらは密接な関係にあることを示している。

Patonは、第XX章において「貸借対照表等式」の公準を叙述するに際し、このような指摘をした後に、 $資産 = 持分$ という貸借対照表等式について論究している。Patonは、この会計等式は「諸勘定のすべての技術的構造」の基礎としてのみでなく、「複式簿記システムの基礎」としても位置づけられるという見解を示している。

「・・・貸借対照表の2つの分類(class)は、ある意味において、同一物の単に異なった側面(aspects)である。資産(assets)は、企業の財産(properties)の価値の直接的表示を表しており、負債(liabilities)は同一価値の間接的表示である。・・・ある場合には、注意は資金の投下されている対象(objects)に集中され、他方ではこれらの資金の源泉(sources)に集中されている。財産の総額は、企業の富(wealth)を示している。そして、資料の双方の分類を表す際には、同一の測定単位たるドルが使用されているために、この総額は必然的に等しい。」(p. 481) ⁵⁾

Patonは、以上のように、会計人は、企業の経済事象を財産と持分という2側面により

把握し、この両側は、それぞれ「資金の投下されている対象」および「資金の源泉」を意味すると主張している。さらに、この両者が数値的に等しいために、資産＝持分という等式が成り立つとしている。

上記の Paton の見解には、以下の 3 つの注目すべき内容が存在している。第 1 は、会計人は企業の経済事象を資産と持分という 2 側面により把握しているとの主張からも理解されるように、Paton は会計測定者の「認識・測定方法」につき論究していることが、改めて理解される。現実の企業会計では、会計測定者は、生起した経済事象を「資金の運用形態」と「資金の調達源泉」という 2 側面からなる「資金の流れ」として認識・測定している。さらに、この流れを、複式の勘定記録および決算財務諸表に記号化していく⁶⁾。

このように、Paton 理論では、メッセージの発信者である会計測定者の測定実務が重視されている。すなわち、彼の理論は、企業会計の測定システムを分析しているのであり、したがって企業会計への静態的な分析をおこなっていると理解される。上記と同趣旨の文言は、Paton[1922]の第Ⅲ章の「基本的分類」と題される章でもみられる (pp. 28-48)。

Paton[1922]の p. 481 の見解における第 2 の注目すべき内容は、会計測定の表示対象に関して見い出される。すなわち、Paton は、「資金の流れ」が会計測定の表示対象であることを主張していると理解される。

杉本典之氏は、「経済財の流入・流出という流れ(flow)そのものが測定対象となるのであるのであって、決して、経済財の在 high(stock)が対象となるわけではない」(杉本[1981], p. 55) という見解を示しているが、Paton の見解は、1920 年代初頭において、この杉本氏の見解とほぼ同一の趣旨を示しているものと理解される。

Paton[1922]の p. 481 の見解における第 3 の注目すべき内容は、Paton が、貸借対照表の資産勘定において表示されているのは、企業の支配下における「資金の流れ」の計算の結果としての「資金の有高」であることを示唆していることである。

既述のように、Paton は、「資金の流れ」こそが会計測定の対象とされていることを主張し、この対象が資産と持分によって測定されていることを主張していた。では、会計期末における複式の勘定記録ないし決算貸借対照表などの決算財務諸表で表示されている対象とはどのようなものであったろうか。私見によれば、会計期末という特定の一時点においては、会計期中の「資金の流れ」を認識・測定した結果としての「資金の有高」が表示されることとなると思考される (杉本[1981], pp. 57-58 参照)。

したがって、既に引用した、貸借対照表上における「資産は、企業財産の価値」(傍点木戸田) の表示であるという Paton の表現は、貸借対照表上の資産勘定は、決算という時点における「資金の有高」を示しているという意味に解釈される。

以上、Paton の提示した「貸借対照表等式」の公準で示された見解では、企業会計の認識・測定方法に言及すると共に、会計測定の様々な側面についてもふれていた。特に、Paton が会計測定の対象として「経済財の流れ」を位置づけると共に、複式の勘定記録な

どの表示対象としては「資金の流れ」や「資金の有高」を位置づけることを示唆していることは注目に値する。このように、Paton 理論は、企業会計の静態的分析の成果が叙述されている。

4. 会計測定構造論の展開

本節では、Paton[1922]の「基本的分類」と題される章に光をあて、同章の基本的内容を概観すると共に、その特色についても明らかにしていきたい。以下、しばらく Paton の展開した「会計測定論」にしたがいながら、彼の静態的分析を紹介していきたい。

Paton[1922]の第Ⅱ章「基本的分類」では、その序章部分において、資産概念や持分概念などを規定するために、仮構的な会社である X 株式会社を仮定している。そして、この企業は創立され、いまや開業を始めうる状態にあると仮定されている。

Paton は、このような状態にある企業において、諸勘定が表示すべき資料の基礎に存在している分類(classes)とは何か、という疑問を提示している(p. 29)。

彼は、このような疑問に答える形で、「…会社は、主として、経済的事実すなわち価値と関わっている。したがって、非常に多くの要素は、はじめから考慮から除外されうる」(p. 29)と指摘し、さらに会計人が利害関係を有し影響を及ぼす領域は、財政状態というある特別な側面のみである(p. 30)と指摘している。

この序章部分においては、以下の3つの点が留意される。その第1は、Paton は、現行の企業会計の測定実務を理論化していく際の基点として、開業時という特定の一時点における企業の財政状態を仮定していることである。いうまでもなく、今日の企業会計は「継続企業(going concern)」の前提に立っており、このような状況下では、会計期間の期中における会計測定の対象は「資金の流れ」として位置づけられる。しかし、Paton[1922]の第Ⅱ章では、開業時における企業の財政状態を仮定しているのであるから、会計測定の対象はこのような状況下における会計測定の対象とは異なる。

序章部分において留意される第2は、したがって会計人が測定する対象として「価値」ないし「資金の有高」が位置づけられていることである。このことはしかし、Paton が、会計期間の期中において会計人が測定する対象までも「資金の有高」を位置づけていることを意味しないことに注意せねばならない。

序章部分において留意される第3は、「会計は、主として、経済的事実すなわち価値と関わっている。したがって、非常に多くの要素は、はじめから考察から除外されうる」という文言からも明らかなように、企業会計の扱う対象とは、貨幣金額と関連させて抽出される抽象的な要素である「価値」であるということが明確に示されていることである。

いうまでもなく、現実の企業会計の測定構造では、会計測定者は、生起した経済事象を貨幣金額に着目しながら資金抽象化されている。その故に、貸借対照表や損益計算書などの財務諸表は、貨幣金額をもって表示されている。したがって、Paton の見解は現実の企業会計の測定構造と密接に関連するものであり、その意味において彼の見解からは現実の

企業会計の測定構造に関する静態的分析をおこなっていることが読みとれる。

これら3つのことを明確に理解しておくことは、Paton[1922]における資産概念および持分概念、さらには会計測定構造の特色を適切に理解していく際に重要である。

Ⅲ 小 括

私は、本稿のⅠにおいて、企業会計は基本的にメッセージの受信者である会計情報利用者中心のコミュニケーション・システムであることを指摘した。そして、企業会計では、社会・経済的状況が安定し、したがってメッセージの発信者である会計測定者と受信者である会計情報利用者の関係が安定した「コード依存」型のコミュニケーション・システムが重要であることをも指摘した。このような企業会計に有効なのは、企業会計の「静態的分析」であった。

コード依存型の企業会計システムでは、会計測定者の存在が重視され、彼の認識・測定行為もまた重視される。Paton 理論は、まさにこのような分析をおこなった業績であった。そこで、本章のⅡにおいて、企業会計の静態的分析という新たな視点から Paton の「貸借対照表等式」と彼の「会計構造論」の基本的性格および問題点を再吟味した。

Paton[1922]で展開された会計公準論では、「貸借対照表等式」の公準において会計測定者の認識・測定の方法について論じられていたことが明らかになった。そして、彼の会計公準論は、彼の会計構造論と密接な関係のもとで論じられていた。

Paton 理論では、会計人は生起した経済事象（「資金の流れ」）を「資金の投下されている対象」と「資金源泉」という2側面に分け認識・測定をおこなっていた。そして、それらを記号化したのが貸借対照表であった。貸借対照表においては、資産 = 持分 という等式が成り立っていた。

Paton の会計測定論ないし会計構造論を、さらに考察していくならば、企業会計の測定対象として「経済財の流れ」が位置づけられていること、会計人は貨幣金額に着目してこの流れを「資金の流れ」に資金抽象化されているプロセスが論じられていることが理解された。そして、期末の資産や負債は、この流れの計算の結果としての「資金の有高」が表示されたものとして位置づけられていた。Paton の会計構造論は、企業会計の測定プロセスを静態的に分析した理論に他ならないことが理解されたのである。

-
- 1) 本稿は、木戸田[1985]、木戸田[2002-a]、および木戸田[2002-c]を手がかりとしつつも、企業会計の静態的分析という新たな視点からこれらを全面的に改稿していきたい。なお、本稿では、「静態的分析」という独自の用語を用いて分析している。この分析視角は、ドイツ会計学における「動態論」や「静態論」という概念とは異なったものである。
 - 2) コミュニケーション・システムを「コード依存」型と「コンテクスト依存」型に類型し、

W.A.Paton 理論における会計構造論の意味

——企業会計の静態的分析の一考察——

社会・経済的状况が変動するのに伴い前者から後者へ移行するとみる業績として池上[1987]が存在している。本章の1は、池上[1987]の見解に多くを学んでいる。

- 3) 企業会計を、一種のコミュニケーション・システムとして理解する我が国の代表的な論者は、杉本典之氏である。私は、大学院在学中から多大の学恩を頂いているが、本稿は杉本学説に多くを依拠しながらも、新たな分析視角から考察をすすめている。
- 4) このような論理として、たとえば Paton & Paton[1941]などにおいて示された見解が掲記される。
- 5) 本章では、引用および要約の傍点部分は、原文がイタリクスであることを示す。
- 6) Paton のこの見解を敷衍するならば、現行の企業会計で作成される「複式」の勘定記録の「複式」の意味がどのようなものであるかが明らかになる。すなわち、複式の意味は、生起した経済事象が「2重分類的複式」の様式で（換言すれば「複眼式」の様式で）認識・測定されていることに求められる。「複式」の意味については、杉本[1981], pp. 83-85 を参照のこと。

参 考 文 献

1. 池上 嘉彦 『記号論への招待』、岩波新書、岩波書店、1987年、池上[1987]。
2. 木戸田 力 「会計的思考と会計測定構造論」、東北大学経済学会『研究年報 経済学』、第46巻第1号、1984年、木戸田[1984]。
3. ———— 「会計測定構造と会計公準」、東北大学経済学会『研究年報 経済学』、第46巻第4号、1985年、木戸田[1985]。
4. ———— 「“国際的調和化”時代の企業会計における記号動態への一視角——新たな会計的意味の表示と会計的記号の体系の変容——」、佐賀大学簿記論研究室編『会計測定の国際的調和』、洋学堂書店、2002年、木戸田[2002-a]。
5. ———— 「会計測定と将来情報」、佐賀大学簿記論研究室編『会計測定の国際的調和』、洋学堂書店、2002年、木戸田[2002-b]。
6. ———— 「会計測定論の論理的基礎」、東北大学経済学会『研究年報 経済学』、第63巻第4号、2002年、木戸田[2002-c]。
7. 杉本 典之 『会計理論の探求——会計情報システムへの記号論的接近——』、同文館出版、1991年、杉本[1991]。
8. Paton, W. A. *Accounting Theory: With Special Reference to Corporate Enterprise*, Accounting Study Press, 1922, Scholars Book, Paton[1922].
9. ———— and Paton Jr, W. A. *Asset Accounting*, The Macmillan Co., 1941, Paton & Paton[1941].
10. ———— and Stevenson, R. A. *Principles of Accounting*, The Macmillan Co., 1918, Paton & Stevenson[1918].

食品業界のビジネス人材養成機関としての「かなざわ食マネジメント専門職大学」の可能性に関する一考察 ーインバウンド市場を含めたグローバル視点の重要性

清水 恭彦*

概要

少子高齢化の中で徐々に大学入学者数が減少する日本において、政府は2017年に55年ぶりに学校教育法を改正し、新たに専門職大学なる学校を設置した。2024年4月末現在で4年生の専門職大学は20校存在する¹。この背景には、ITや介護など国内需要が確実に高まる分野に高度な専門的知識、能力を持った人材を輩出することに加えて、バブル期終焉の1992年以降、相対的に国際競争力をなくしている産業が多い中で、新たな外貨獲得力の可能性が高くなってきている分野（アニメなどのエンタメ関連分野）や、いままではあまり国外市場を意識してこなかったものの海外市場の開拓が急務で重要となる分野（日本の加工食品、日本の農産物）にも高い実務的能力を持った人材を養成していこうということがあると思われる。このような中で2021年に開学した、かなざわ食マネジメント専門職大学は、インバウンドを含む海外事業人材に特化した専門の養成機関ではないことはいうまでもないが、基本的には後者に分類されると思われる。このことを前提とし、本学の存在意義と、そのあるべき姿について考察を行ったものである。尚、本見解は完全に個人的なものであり大学の公式な方針等とは関係がないことを念のため明記する。

* しみず やすひこ かなざわ食マネジメント専門職大学フードサービスマネジメント学部 教授
かなざわ食マネジメント専門職大学紀要 第3号 (2025年)

1. 専門職大学の誕生とその役割

2017年に学校教育法が55年ぶりに改正され修業年限4年、卒業すれば「学士（専門職）」の専門職学位を得られる専門職大学が誕生した。学校教育法の第83条の2第1項には「深く専門の学芸を教授研究し、専門性が求められる職業を担うための実践的かつ応用的な能力を展開させることを目的とするものは、専門職大学とする」とあり、第2項には「専門職大学は、文部科学大臣の定めるところにより、その専門性が求められる職業に就いている者、当該職業に関連する事業を行う者その他の関係者の協力を得て、教育課程を編成し、及び実施し、並びに教員の資質の向上を図るものとする。そして、その具体的な設置基準として文科省は学位を得るのに必要な単位のうち実習が占める割合を3割から4割と定め、これらの実習は企業などの現場で行われ、教員のおおむね4割以上を実務家が務めるものとするとしている。また教育だけではなく、大学である以上、研究も行うものとするが、理論と実践を架橋する機関として、「実践の理論」を重視した研究を志向することを求めているⁱⁱ

2. 農産物、加工食品分野に輸出に関する政府の方針

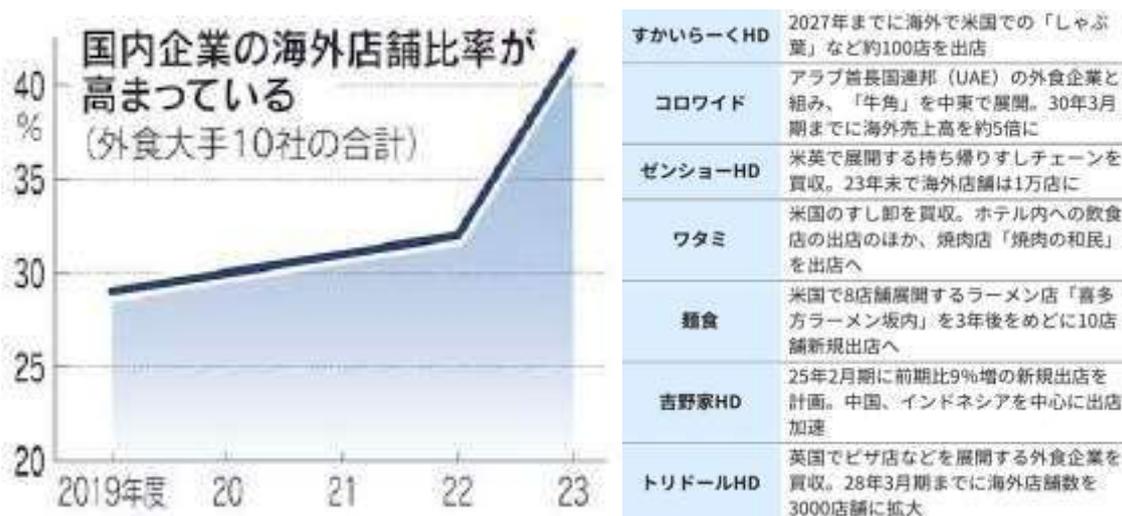
第二次安倍政権の2013年、日本再興戦略を閣議決定し、その一環として日本の農産物・加工食品の輸出にも力を入れる方針とした。この方針は戦後一貫して自動車に代表される工業製品を中心に輸出を行い、外貨を稼いできた日本にとっては大きな方向転換ともいえる。その結果、その輸出額は2013年には約5,500億円であったものが、2020年（令和2年）は9,860億円と約1兆円まで増大した、しかし、5年後の2025年にはその倍の2兆円、そして10年後の2030年には5倍の5兆円とする目標を定めた。これは非常に高い目標だといえる。もちろん政府はこのことを認識しており、これを実現するために多くの施策を農水省が中心となり、海外への輸出を行う食品メーカーへの補助金制度ⁱⁱⁱなども行っており、他にも例えば農林水産省、JETRO、JAを含む15団体で2017年4月に日本の農林水産物・食品の輸出プロモーション戦略の策定・実施機関としてJFOOD0（ジェイフード）が日本貿易振興機構に附置する形で設立された。このような中、現在では、加工食品の分野ではウイスキー、日本酒、抹茶、カレールー等の調味料が上位の輸出品となっているが、まだまだ十分とはいえない。参考まで日本のウイスキーと日本酒を合わせて、約1000億円の輸出となっているが、英国のスコッチウイスキーは毎年、日本円で1兆円以上の輸出があり、英国の最重要輸出品目となっている。その意味からも、今後は政府の支援策だけではなく、食品業界としても人材の質を含めた企業能力の向上を継続して高めていくことが求められている。

3. 日本の外食産業の海外進出

農水省は農産水産物や食品メーカーの海外輸出ばかりではなく、日本の外食産業等の海外

展開支援なども行うとともに日本食の海外普及に向けても農水省は様々な支援策を行っており、例えば「日本の食文化海外普及人材育成事業」を通じて日本の食文化の海外普及を目的に調理又は製菓の学校を卒業した外国人留学生が、日本国内の飲食店等で働きながら技術を学べる制度（最長5年）を実施している^{iv}。また、外食産業に関しては、政府は第二次安倍政権の時から外食チェーン等のサービス産業の海外展開についても関心を示していたこともあり、経済産業省を通し、一般には「クールジャパン機構」と呼ばれる海外需要開拓支援機構を通じた支援も行っている。ちなみに経済産業省は「日本の魅力」を事業化し、海外需要の獲得につながる分野として、「アニメなどのメディア・コンテンツ」「食・サービス」「ファッション・ライフスタイル」を挙げて、実際にこれらの分野に集中的に投資して支援を行っている^v。

実際、2010年代からは多くの外食チェーンが世界的な日本食ブームにも後押しされるように海外進出を加速してきている。日経新聞^{vi}によれば外食産業の収益は海外事業がキイとなってきておりサイゼリアは23年9月―24年2月の連結決算のうちアジア事業が55億となり利益の大半を海外で稼いだとしている。トリドール社も、現在、世界約30の国と地域に、約2,000店舗の飲食店、約20のブランドを展開しており、栗田社長は、海外進出はリスクではなく、少子高齢が進む日本にとどまることこそが一番のリスクだといい、近年ではヨーロッパやアメリカなどに展開を強化し、グローバルフードカンパニーを目指すという。スシローを経営するFood & Life Companies (F&L)は2024年9月期、売上、店舗数では国内が7―8割ながら海外174店舗の貢献度は高く全社営業利益の約半分となったことを発表。外資系企業である日本マクドナルド以外の日系大手外食チェーンの多くが海外市場に活路を見出そうとしている。



出典：日経新聞デジタル版 2024年5月13日より抜粋

4. インバウンド消費への注力

2025年1月10日、政府は首相官邸で農林水産物・食品の輸出拡大に関する関係閣僚会議を開き、海外販路開拓や輸出産地育成による「輸出拡大の加速化」や「食品産業の海外展開」に加えて、「インバウンド（訪日客）による食関連消費の拡大」を足して、三本柱の政策で進めていく方針を決めたと発表した^{vii}。事実、海外から日本を訪れる観光客の約7割が食事を楽しみに来ているといわれているが、2025年1月15日に観光庁は訪日旅行外国人消費額が8.1兆円と過去最高となり、その内訳は飲食費が21.5%、買い物が29.5%だったとの速報値を発表した^{viii}。そして、この買い物の中では、京都市宇治周辺のお茶屋ではインバウンドによる抹茶の「爆買い」が続いており、お店に並んだ途端に売り切れ状態だとNHKを含む多くのメディアが報じている^{ix}。また大手緑茶メーカーの伊藤園は都心や空港に「お茶専門店 伊藤園」や「茶寮 伊藤園」を主にインバウンド向けに展開しているが緑茶や抹茶のティーバッグが海外からの観光客に大人気で、どこにおいてもすぐに売り切れになるという^x。これに輸出も伸ばしているウイスキー、日本酒、即席味噌汁、カレーのルーなどもお土産として人気があるが、ネスレ日本のキットカット（特に日本でしか売られていない抹茶味）や江崎グリコのポッキー、そして日本人にも土産品として人気のある北海道の石屋製菓の白い恋人なども大人気である。その他の企業にとっても日本の食品企業には中小企業が多く、なかなか海外進出ができないなかで、まずは国内のインバウンド市場に力を入れることは現実的に有効な方法かもしれない。同時に外食分野でも多くのインバウンド客は食を目当てに来て「ぐるなび」などのインバウンド向けで多言語対応しているグルメサイトからの外国語版で人気の店を探すようなケースが多く、地場の個人経営の店などであっても対応がしやすくなることはいままでもない。

5. かなざわ食マネ専門職大学からの食のグローバル発信と地元を超えての学生募集

それでは、このような状況下で開学した本学は、いったいどのような役割を担うべきであろうか。少なくとも多くの地方の大学の経営学部に求められているような地域の経済を担う人材を主に食の分野で排出するというのではないように思われる。やはりグローバルな視点を持った食のプロを養成するべきであろう。もちろん大学で学ぶ食のビジネス分野がすべて海外絡みとなる必要はないことはいままでもない。国内においてもフードロスの問題や食を中心とした地方創世、国内市場における食の健康志向トレンドとそれに伴う変化など学ぶべき分野は沢山ある。しかるにやはり学生の将来の希望の進路が外食産業や食品メーカー、または農業団体であれインバウンド市場を含む海外関連市場の開拓が最重要事項の課題となるように見える。そうなれば、当然、大学としてもこのことを意識したカリキュラムが求められるといえるだろう。

学生集めについては「食マネジメント」という分野に特化した大学であるために前述したように国の政策とは一致している反面、地元中心に学生を集めようとするれば、ただでさえ少子化により地方の私立大学の定員割れが常態化する中で、一般の経済経営学部などと比べても学生集めに苦勞することは明らかであろう。その意味では広く学生を募るとい

ことが他の地方私立大との大きな違いとなるべきだと思われる。それが実現すれば、他の地方の私立大学とは明確な差別化がされており、国家政策とも合致することから少子化の中にあっても学生集めに苦勞することはなくなるとと思われる。

ちなみに金沢から世界に向けての「食関連の情報発信」をみてみれば、金沢は確かに地方都市であるが、実は海外では、金沢は欧米を中心に人気の都市になってきている。米国の大手雑誌「ナショナルジオグラフィック」は2024年10月23日、「Best of the World 2025（2025年に行くべき世界の旅行先25選）」を発売、そこで日本からは金沢が選ばれたが、11月には同じく米国の富裕層向け旅行雑誌であるコンデナスト・トラベラーのBright Ideas in Travel 2024でも旅行先部門で世界の12地域の一つとして東アジアで唯一金沢市が選ばれている。そして、2005年1月にはフランスの女性誌「ELLE FRANCE（エル フランス）」においても「一生のうちに訪れるべき世界8カ所」のひとつに金沢を選んだ^{xi}。それ以上に、それに先立つ2023年4月、1600万人の読者を持つ米国最大のグルメ雑誌「Food & Wine」が金沢を「次に来る世界屈指の美食の7都市」に日本の都市で唯一選んでいるのである^{xii}。その意味では食ビジネスにおいては金沢が日本の中心都市のひとつと海外からの情報により国内の学生も認識するようになってもおかしくはないと考える。

6. 実務家教員のあり方について

専門職大学では前述したように学校教育法の第83条の2第1項で「専門性が求められる職業を担うための実践的かつ応用的な能力を展開させることを目的とする」としている。そして「教員のおおむね4割以上を実務家が務めるものとする」とする。そうであれば、実務家教員に求められるのは単に過去の実務経験だけではなく、まさに現在進行形の実務経験も求められるのではないだろうか。文科省もそのことを意識したのか専門職大学における「みなし教員」を必要専任教員のおおむね二割以内、つまり実務家教員の約半分まで認めているが、これは「企業等の現場で現に取り扱われる生きた知識・技能等を教授する役割を期待」^{xiii}するものであるとしていることから明らかと思われる。そうであれば専門職大学における実務家教員の理想的な形としては欧米の職業訓練学校ともいえるビジネススクールの一部でも見られるように主軸は大学に置きながら週の1-2日は教員自らが担当科目に関連する実務—自らが会社の社外取締役となる、企業のコンサルタントのような仕事にも従事する等、実務と教育の両方に同時に携わることも効果的であるように思われる。これは専門職大学の学生に義務付けされている企業等で実務に従事する臨地実習についてもより適切な助言や支援が教員側からも行える可能性が高まると思われる。また「食」にフォーカスしている大学というからには、様々な食の分野—外食チェーン、食品メーカー、大手流通・小売り等、そして職種なども製造、商品開発、調達物流、マーケティング、店舗運営等の分野の実務者、実務経験者、専門家が揃っており、名実ともに教員は食分野のプロ集団であることも同時に求められるであろう。そして、やはりこれらの食

の専門家に加えて、学生にグローバルビジネスにおいて助言ができる、海外ビジネスの実務経験者、異文化圏の企業、人との交渉経験者、その研究者などが教員としていることも非常に重要になってくると思われる。

7. 成功している専門職大学が持つ視点

専門職大学自体の制度が新しく、現段階ではどこが成功して、どこが失敗したとはいえないかもしれない。しかし、その中でも比較的成功しているといわれている専門職大学に東京を中心に名古屋、大阪に展開する国際ファッション専門職大学がある。その成功要因は大都会の中にある（東京は新宿）という立地なのか豊富な資金力なのか、それとも専門分野の特性なのかはわからないが、HPの中の近藤誠一学長の大学紹介^{xiv}を見るとひとつの視点が見えてくる。それは「グローバル視点」である。近藤学長による大学紹介は本大学が誕生した理由、重視する点として4点を挙げており、その最初は次の言葉で始まっている。「なぜ今、ファッションを軸に『グローバルビジネス』を考えることが必要なのか」。つまり、グローバル視点で考える必要性である。そして、2点目にファッション業界も環境を重視したビジネスモデルを考える必要性、3点目には企業と連携して社会的な実践の中で教育を行っていく必要性、そして最後の4点目としてマーケットは世界であり、日本の良さを武器に、グローバルリーダーを育てる必要性としている。そして最後は（本学で学んだ）皆さんが、世界で活躍する日を楽しみにしていますと結んでいる。つまり、最初と最後に本大学の学生は視点をグローバルに持てと言っているのである。この中でも注目に値するのは最初のグローバル視点の必要性の後にある「経済産業省はこれからの日本における、ファッション領域を通じた持続的な価値創造を促進するため、『ファッション未来研究会』を2021年に開催しました」との説明であり、その中で「ファッションとは、単に身体保護等の機能としての衣服の議論に留まらず、独自の文化や価値観、人の創造性を表す媒体でもあり、人口減少下及び経済社会のデジタル化が進む我が国における海外需要獲得戦略の中でも、最も重要視される領域の1つです。」（下線は筆者）と定義されていると述べている。

このことから考えると、近年、開学が認められた各専門職大学には文科省が要求する形式上の設立要件だけではなく、ある程度の政府の意向も反映しているように思える。つまり、介護やIT系など国内の需要が高まる分野があり、他の分野—ファッション分野をはじめ、食品、アニメの分野の専門職大学は、世界市場を見据えたカリキュラムとそれに対応できるスタッフを揃えることが大学運営の望ましい形と思われる。

8. まとめ

以上のことから、少子化による学生減少の時代でも、社会の需要が増えていく分野を選び、そこに特化していく大学、専門職大学は成功する可能性は大きいと考えるが、その際の不可欠となるのは改めて「グローバルな視点」といえるのではないだろうか。少な

くとも本学のような食ビジネスの分野ではいえるだろう。文科省としては、それを絶対的な要件とはいわないかもしれないが、少なくとも安倍政権の時の政府側の意向は食ビジネスの分野にはグローバル視点を期待していたといえる。その一方で、電子部品はもちろん、アニメやファッション分野と比べて食品の海外輸出は世界的な日本食ブームといえども嗜好性の問題、そして多くの食品メーカーは海外経験の乏しい中小企業であることもあり、海外市場の開拓は簡単ではないであろう。その意味では、まずはインバウンドを対象とした活動から始めるのもよいと思えるが、そうであるからこそ食ビジネスを支える人材を養成する専門職大学としては、グローバル視点を常に意識して大学運営を行っていくことが成功の要因だと考える。

-
- ⁱ 文部科学省 HP https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senmon/1414446.htm
- ⁱⁱ 文部科学省専門職大学の設置について
2018. 11. 21—https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senmon/_icsFiles/afieldfile/2018/11/16/1410421_001_1.pdf)
- ⁱⁱⁱ 例えば、農水省の輸出・国際局の輸出支援課が窓口となって海外輸出を計画する中小の食品メーカーに最大5億円までの補助金を出す（同額を自社で出資することが条件）「食品産業の輸出向け HACCP 等対応施設整備事業」などがある
- ^{iv} 農水省 HP <https://www.maff.go.jp/j/shokusan/gaisyoku/ikusei/>
- ^v クールジャパン機構 <https://www.cj-fund.co.jp/about/company.html>
- ^{vi} 日経新聞 2024年5月13日
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0UC12BLX0S4A310C2000000/>
- ^{vii} 日経新聞 稼げる農業へ、食品産業の海外展開支援 関係閣僚会議
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0UA101WB0Q5A110C2000000/>
- ^{viii} 観光庁インバウンド消費動向調査 2015. 1. 15
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001856155.pdf>
- ^{ix} NHK News Web 「宇治 高まる抹茶人気 戸惑いの声も」
<https://www3.nhk.or.jp/lnews/kyoto/20250226/2010021959.html>
- ^x 2025年2月14日伊藤園本社におけるマーケティング本部での筆者による聞き取り調査
- ^{xi} 北國新聞デジタル版 2025. 1. 17 https://www.hokkoku.co.jp/articles/-/1632831#goog_rewarded
- ^{xii} Food & Wine 2023
<https://www.foodandwine.com/worlds-next-great-food-cities-7484717>
- ^{xiii} 文部科学省専門職大学の設置についての資料 pp 5 6 および pp 9 1
- ^{xiv} 国際ファッション専門職大学 HP <https://www.piif.ac.jp/about/president/>

地域記号化体系の普遍的な生成的性質
—— 記号情報論確立の基礎として ——

地域記号化体系の普遍的な生成的性質
—— 記号情報論確立の基礎として ——

古賀弘毅¹・木戸田力²

Universal Generative Property in Regional Symbolizing
Systems: As a Base to Establish Information Semiotics

Koga, Hiroki & Tsutomu Kidota

Abstract

We observe the negative, non-past and adverbial forms of verbs in the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect. We will show that no single form of the verb forms in the paradigm alone can identify the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to in the Tokyo dialect or in the Ariake western Saga dialect, and further that a pair of the patterns of the non-past forms and the adverbial forms can identify the derivational and inflectional class that the paradigm belong to, i.e., can be a predictor of the other verb forms in the two dialects. It suggests an explanation to why the children acquire the language in a relatively short period of time. The current study implies that some pair of the patterns of two forms in the paradigm identify the derivational or inflectional class that the paradigm belongs to. Dialects share the morphological generative property on what form identifies the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to.

¹ こが ひろき 佐賀大学 芸術系・国際交流推進センター 准教授

² きどた つとむ かなざわ食マネジメント専門職大学 フードサービスマネジメント学部 教授

I Introduction

1.1 Predictions between Verb Forms

We will observe verb forms (especially, three verb forms) of the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect, as provided in Koga *in review* and Koga 2012b, and discover what follow. No pattern of the verb forms alone can identify the derivational and inflectional class their paradigms belong to, i.e., can be a predictor of the others in the paradigms, and yet a pair of the patterns of the non-past forms and the adverbial forms together can. (The three verb forms we are concerned with are the adverbial forms, the non-past forms and the negative forms.) For example, if the non-past form is /kuru/, then it alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, and so its negative form cannot be uniquely determined: either /kinai/ or /kiranai/. If a pair of a non-past form and an adverbial form in this order is (/kuru/, /kiri/), then the pair alone can identify the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to: /kiranai/. The current study of generative linguistics implies to the study of regional symbolizing system that local symbolizing systems share the morphological generative property on what form identifies the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to.

1.2 Verb Forms of the Tokyo Dialect and the Ariake western Saga Dialect

Table 1 exemplifies the non-past form (dictionary form), the adverbial form and the negative form of one verb for each group of the same stem-final verbs in the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect (Kyushu Hougengakkai, 1969; Koga and Ono, 2010; Koga, 2011; 2012a; 2012b). The data of the non-past forms in this paper are those of a group of the native speakers of the Ariake western Saga dialect who prefer the glottal stop to the lengthened vowel for compensation. They are the same as those in a minority of the native speakers of the Takeo Saga dialect (Koga *in review*). There are four derivational and inflectional classes for the verbs of the Tokyo Japanese. Each derivational and inflectional class is a set of the paradigms that exhibit the same derivational and inflectional patterns (Haspelmath and Sims, 2010). For example, the paradigm of the verb *mat`wait`* is {*matu* [matsu]_[Vform non-past], *mati* [matʃi]_[Vform adverbial], *matanai*_[Vform negative and non-past]} in the Tokyo dialect and is {*matu* [matsu], *mati* [matʃi], *mataN*} in the Ariake western Saga dialect.^{1,2} See the table in the footnote 1 for the non-past form (dictionary form), the adverbial form and the negative form of one verb for each group of the same stem-final verbs in the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect.

The four classes are 1) of the consonant-final stem verbs, 2) of the vowel-final stem verbs, 3) of the multiple stem *k/ko* verb and 4) of the multiple stem *s/si* verb. The

paradigm {*matu* [*matsu*]_[Vform non-past], *mati* [*mat/i*]_[Vform adverbial], *matanai*_[Vform negative and non-past]}, for example, is a member of the derivational and inflectional class of the consonant-final stem verbs of the Tokyo dialect.

The derivational and inflectional class of the consonant-final stem verbs is further broken into nine groups depending on which consonant among *t*, *r*, *w*, *n*, *m*, *b*, *k*, *g* and *s* the verb stem ends with.

Additionally, the derivational and inflectional class of the vowel final-stem verbs is further broken into two classes depending on which vowel between *e* and *i* the verb not-shorter stems end with in the Ariake western Saga dialect. The ‘vowel /e/-final’ stem verbs are of multiple stem verbs with the longer stem ending with /e/ and the shorter stem with the stem-final /e/ absent in the Ariake western Saga dialect (Koga and Ono 2010; Koga *in review*). The multiple stems of the verb with the meanings of do are *s/se* in the Ariake western Saga dialect. Many parts of the Saga dialects are said to be the remnants of the language in Muromachi Era, in the 14th to the 16th century.

The differences in the three verb forms between the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect are:

- 1) If a verb is a so-called ‘vowel /e/-final stem’ verb in the Tokyo dialect, which means its non-past form is in the scheme of *Xeru*, then the same non-past form is in the Ariake western Saga dialect except for the sequence *u?* replacing the final sequence *eru*, as *neru* ‘sleep’ corresponds to *nu?* in the table.
- 2) If a non-past form ends with *ru* in the Tokyo dialect, then the same non-past form is in the Ariake western Saga dialect except for the glottal stop replacing the final sequence *ru*, as *toru* corresponds to *to?*, *kuru* to *ku?* and *suru* to *su?* in the table.
- 3) The Ariake western Saga dialect counterparts of the negative forms are the same as that of Tokyo dialect except for the syllabic nasal *N* replacing the final *nai*, as *yomanai* in the Tokyo dialect corresponds to *yomaN* in the Ariake western Saga dialect.³ If the verb is a vowel /i/-final stem verb, then its negative form is preferred to be one with the sequence *ra* inserted as opposed to the ordinary one, as *minai* ‘do not look at’ corresponds to *miraN* and *?miN*. If the verb is a ‘vowel /e/-final stem’ verb and the number of the moras of the stem is no more than two, then its negative form is preferred to be one with *ra* inserted as opposed to the ordinary one, as *nenai* ‘do not sleep’ corresponds to *neN* and *neraN*.

II. Prediction of Verb Forms in Word-based Morphology

There are two lines of theory in morphology: Morpheme-based Morphology and Word-based Morphology. We will discuss what pattern of the verb forms can identify the

derivational and inflectional class that their paradigm belongs to, i.e., can be a predictor of the other forms in word-based theory, as discussed in several parts of Haspelmath and Sims (2010).

The forms we are concerned with in this paper are the three verb forms, 1) adverbial forms, 2) non-past forms and 3) negative forms. What follows describes where the adverbial forms, the non-past forms and the negative form occur grammatically. First, the adverbial forms, or the present participle forms and the gerundive forms, occur

1) as the theme verb of the desiderative forms like *yomi-ta-i* 'want to read', *tabe-ta-i* 'want to eat', *ki-ta-i* 'want to come' and *si-ta-i* 'want to do',

2) as the theme verb of the honorific and humble forms like *o-yomi-ni naru* 'graciously read', *o-tabe-ni naru* 'graciously eat', **o-ki-ni naru* cf. *irassharu* and **o-si-ni naru* cf. *nasaru*, and

in many other verb forms.⁴

The adverbial forms of the Tokyo dialect and those of the Ariake western Saga dialect are the same.

Second, the non-past forms occur

1) as the dictionary forms,

2) sentence-finally,

3) as the theme verb clause for the affixes like *to* for the Tokyo dialect and *gii* for the Ariake western Saga dialect 'if' like *yomu-to* 'if you read ...', *taberu-to* 'if you eat ...', *kuru-to* 'if you come,' and *suru-to* 'if you do ...', *yomu-gii*, *tabu-gii*, *kug-gii* and *sug-gii* and

4) in many other verb forms, e.g., negative imperative forms and conjecture forms.

In addition, the non-past forms are the 'inputs' for the other forms, e.g., the /ba/-conditional forms, as, for example, formulated as [*Xu* [Vform non-past]] <-> [*Xeba* [Vform conditional]] 'if X' in the Tokyo dialect.

Third, the negative forms are the 'inputs' to derive other forms, e.g., the negative conditional forms, as, for example, formulated as [*Xanai* [Vform negative]] 'don't do X' <-> [*Xanakereba* [Vform negative conditional]] 'if ... don't do X, ...' in the Tokyo dialect.

2.1 Whether Any Pattern of Verb Forms Alone Can be Predictor of Other Forms

No pattern of the verb forms alone can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, i.e., can be a predictor of the other patterns of the verb forms in the paradigms.

a. Adverbial Forms Alone as Predictor

The pattern of the adverbial forms alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to. For example, if an adverbial form takes the pattern *Xi*, then it alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to. Its non-past form, for example, cannot be uniquely determined, or is either *Xu* of the C-final class, *Xiru* of the /i/-final class or *Xuru* of the multiple stem classes in the Tokyo dialect. This holds true in the Ariake western Saga dialect.

Stem Type	Adverbial Forms	Non-past Forms
C-Final	<i>Xi</i> (e.g., <i>aki</i> `opening`)	<i>Xu</i> (<i>aku</i>)
Vowel /e/-Final	<i>Xe</i>	<i>Xeru</i> ; <i>Xu?</i>
Vowel /i/-Final	<i>Xi</i> (e.g., <i>aki</i> `being tired`)	<i>Xiru</i> ; <i>Xi?</i> (<i>akiru</i> ; <i>aki?</i>)
Two Stems, `come`	<i>Ki</i>	<i>kuru</i> ; <i>ku?</i>
Two Stems, `do`	<i>Si</i>	<i>suru</i> ; <i>su?</i>

Table 2: The Morphological Schemes of Three Verb Forms⁵

Specifically, if the adverbial form is *aki*, then its non-past form cannot be uniquely determined, or is either *aku* `open`, which is a consonant-final stem verb, or *akiru* `get tired`, which is a vowel /i/-final stem verb.⁶ The finding is similar to the fact in the Latin nouns that the nominative singular alone cannot identify the inflectional class that the paradigm of the Latin noun belongs to (Haspelmath and Sims 2010: 167).

b. Non-past Forms Alone as Predictor

The pattern of the non-past forms alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, either. For example, if the non-past form takes the pattern *Xiru* for the Tokyo dialect and *Xi?* for the Ariake western Saga dialect, it alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to. Its adverbial form, for example, cannot be uniquely determined, or is either *Xi* of the vowel /i/-final stem paradigm or *Xiri* of the consonant-final stem paradigm. If the non-past form is specifically *kiru* for the Tokyo dialect and *ki?* for the Ariake western Saga dialect, its adverbial form is either *ki* `wearing`, which is a vowel /i/-final stem verb, or *kiri* `cutting`, which is a consonant-final stem verb.

Stem Type	Non-past Forms	Adverbial Forms
C-Final	<i>Xu</i> (e.g., <i>kaeru</i> 'return', <i>nu?</i> 'paint', <i>kiru/ki?</i> 'cut'; <i>kuru/ku?</i> 'turn'; <i>suru/su?</i> 'scratch')	<i>Xi</i> (<i>kaeri</i> , <i>nuri</i> , <i>kiri</i> , <i>kuri</i> , <i>suri</i>)
Vowel /e/-Final	<i>Xeru</i> (e.g., <i>kaeru</i> 'change'); <i>X(j)u?</i> (<i>nu?</i> 'sleep')	<i>Xe</i> (<i>kae</i> , <i>ne</i>)
Vowel /i/-Final	<i>Xiru</i> ; <i>Xi?</i> (e.g., <i>kiru</i> 'wear')	<i>Xi</i> (<i>ki</i>)
Two Stems, 'come'	<i>kuru</i> ; <i>ku?</i> (<i>kuru/ku?</i>)	<i>Xi</i> (<i>ki</i>)
Two Stems, 'do'	<i>suru</i> ; <i>su?</i> (<i>suru/su?</i>)	<i>Xi</i> (<i>si</i>)

Table 3: The morphological schemes of the three verb forms

c. Negative Forms Alone as Predictor

The pattern of the negative forms alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, either. Tokyo Dialect: If the negative form takes the pattern *Xinai*, it alone cannot identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to. Its non-past form cannot be uniquely determined, or is either *Xiru* of the vowel /i/-final stem paradigm or *Xuru* of the multiple stem *s/si* paradigm. For example, if the negative form is *kisinai*, its non-past form can be either *kisuru* 'attribute', the head of which is the multiple stem *s/si* verb, or *kisuru* 'squeak', which is a vowel /i/-final stem verb. Ariake western Saga Dialect: If the negative form is *XiraN*, its adverbial form is not uniquely determined, or is either *Xi* of the vowel /i/-final stem paradigm or *Xiri* of the consonant-final stem paradigm. For example, if the negative form is *kiraN*, then its adverbial form is either *ki* 'wearing', which is a vowel /i/-final stem verb, or *kiri* 'cutting', which is a consonant-final stem verb.

Stem Type	Negative Forms	Non-past Forms
C-Final	<i>Xanai</i> ; <i>XaN</i> (<i>seraN</i> 'not compete'; <i>kiraN</i> 'not cut')	<i>Xu</i> (<i>se?</i> , <i>ki?</i>)

Vowel /e/-Final	<i>Xenai</i> ; <i>XeN</i> , <i>XeraN</i> (* <i>seN</i> , * <i>seraN</i>)	<i>Xeru</i> (<i>kae</i> , <i>ne</i>); <i>Xu?</i>
Vowel /i/-Final	<i>Xinai</i> (e.g., <i>kisinai</i> `make sounds`); <i>XiN</i> , <i>XiraN</i> (<i>kiN</i> , <i>kiraN</i> `not wear`)	<i>Xiru</i> (<i>kisiru</i>); <i>Xi?</i>
Two Stems, `come`	<i>konai</i> ; <i>koN</i> (<i>kuru/ku?</i>)	<i>kuru</i> (<i>ki</i>); <i>ku?</i>
Two Stems, `do`	<i>sinai</i> (<i>kisinai</i> `attribute`); <i>seN</i> (<i>seN</i>)	<i>suru</i> (<i>si</i>); <i>su?</i>

Table 4: The morphological schemes of the three verb forms

2.2 Whether Any Pair of Patterns of Verb Forms Alone can be Predictor of Other Forms

Some pair of patterns of the verb forms can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, i.e., can be a predictor of the other forms.

a. Pair of Non-past Forms and Negative Forms Alone as Predictor

The pair of the patterns of the non-past forms and the negative forms alone can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong in the Tokyo dialect, whereas they alone CANNOT in the Ariake western Saga dialect, as both will be discussed below.

Tokyo Dialect: There are four possibilities in which one non-past form takes two or more patterns of paradigms, for example, the non-past form *kaeru* takes the patterns of *Xu* of the consonant-final stem paradigm and *Yeru* of the vowel /e/-final stem paradigm: 1) *Xu* and *Yeru*, 2) *Xu* and *Yiru*, 3) *Xu* and *kuru* and 4) *Xu* and *suru*, where the symbols *X* and *Y* are different variables.

1) If a non-past form takes the pattern *Xeru* of the vowel /e/-final stem paradigm, then it can also take the pattern *Yu* of the consonant-final stem paradigm. Then, its negative form will be either *Xenai* of the vowel /e/-final stem paradigm or *Xeranai* of the consonant-final stem paradigm. If the non-past form takes the pattern

Xeru and the negative form takes the pattern *Xenai*, then its adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *Xe* of the vowel /e/-final stem paradigm. If the non-past form takes the pattern *Xeru* and the negative form is *Xeranai*, then the adverbial form is *Yeri* of the consonant-final stem paradigm.

Stem Type	Non-past Forms	Negative Forms	Adverbial Forms
C-Final	<i>Xu</i> (e.g., <i>ki?</i>)	<i>Xanai; XaN</i> (<i>kiraN</i>)	<i>Xi</i> (<i>kiri</i>)
Vowel /e/-Final	<i>Xeru; Xu?</i>	<i>Xenai; XeN,</i> <i>XeraN</i>	<i>Xe</i>
Vowel /i/-Final	<i>Xiru; Xi?</i> (<i>ki?</i>)	<i>Xinai; XiN,</i> <i>XiraN</i> (<i>kiran</i>)	<i>Xi</i> (<i>ki</i>)
Two Stems, 'come'	<i>kuru; ku?</i>	<i>konai; koN</i>	<i>ki</i>
Two Stems, 'do'	<i>suru; su?</i>	<i>sinai; seN</i>	<i>si</i>

Table 5: The morphological schemes of the three verb forms

2) If the non-past form takes the pattern *Xiru* of the vowel /i/-final stem paradigm, then it can also take the pattern *Yu* of the consonant-final stem paradigm. Then, its negative form will be either *Xinai* of the vowel /i/-final stem paradigm and *Xiranai* of the consonant-final stem paradigm. If the non-past form takes the pattern *Xiru* and the negative form takes the pattern *Xinai*, then its adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *Xi* of the vowel /i/-final stem paradigm. If the non-past form takes the pattern *Xiru* and the negative form is *Xiranai*, then the adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *Xiri* of the consonant-final stem paradigm.

3) If a non-past form is *kuru*, then its negative form is either *konai* of the multiple stem *k/ko* paradigm or *kuranai* of the consonant-final stem paradigm. If the non-past form takes the pattern *kuru* and the negative form takes the pattern *konai*, then its adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *ki* of the multiple stem *k/ko* paradigm. If the non-past form takes the pattern *kuru* and the negative form is *kuranai*, then the adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *kuri* of the consonant-final stem paradigm.

4) If a non-past form is *suru*, then the negative forms will be *sinai* of the multiple

stem *s/si* paradigm and *suranai* of the consonant final stem paradigm. If the non-past form takes the pattern *suru* and the negative form takes the pattern *sinai*, then its adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *si* of the multiple stem paradigm. If the non-past form takes the pattern *suru* and the negative form is *suranai*, then the adverbial form will uniquely be determined to take the pattern *suri* of the consonant final stem paradigm.

In all the four cases, if a pair of the non-past form and the negative form is determined, then its adverbial form will be uniquely determined in the Tokyo dialect. The patterns of the non-past forms and the negative forms alone thus identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to in the Tokyo dialect.

Ariake western Saga Dialect: On the other hand, the pair of the patterns of the non-past forms and the negative forms alone CANNOT identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to in the Ariake western Saga dialect. If a pair of the patterns of the non-past forms and the negative forms takes the pattern (*Xi?*, *XiraN*), then their adverbial forms cannot be uniquely determined, or are either *Xi* of the vowel /i/-final stem paradigm or *Xiri* of the consonant-final stem paradigm. For example, the paradigm of (*ki?*, *kiraN*, *ki*) is of the verb with the meaning of wear in the dialect, and the paradigm of (*ki?*, *kiraN*, *kiri*) is of the verb with the meaning of cut. Note that the negative form of the verb with the meaning of wear is *kiraN* as well as *kiN* in the Ariake western Saga dialect. The former *kiraN* is preferable, as seen in the table at the beginning of this paper.

b. Pair of Adverbial Forms and Negative Forms Alone as Predictor

The pair of the patterns of the adverbial form and the negative form alone CANNOT identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to either in the Tokyo dialect or in the Ariake western Saga dialect.

Tokyo Dialect: The pair of the patterns of the adverbial forms and the negative forms alone CANNOT identify the derivational and inflectional class that the paradigm belong to in the Tokyo dialect. If pairs of the adverbial forms and the negative forms take the pattern (*Xi*, *Xinai*), then their non-past forms cannot be uniquely determined, or are either *Xiru* of the vowel /o/-final stem paradigm or *Xuru* of the multiple stem *s/si* paradigm. For example, the paradigm of (*si*, *sinai*, *suru*) is of the verb with the meaning of do in the dialect, and the paradigm of (*si*, *sinai*, *siru*) is of the vowel /i/-final stem verb theoretically although the latter is not a word in the dialect.⁷

Stem Type	Adverbial Forms	Negative Forms	Non-past Forms
C-Final	<i>Xi</i>	<i>Xanai; XaN</i>	<i>Xu</i>
Vowel /e/-Final	<i>Xe</i>	<i>Xenai; XeN, XeraN</i>	<i>Xeru; Xu?</i>
Vowel /i/-Final	<i>Xi (si)</i>	<i>Xinai (sinai); XiN, XiraN</i>	<i>Xiru; Xi?</i>
Two Stems, 'come'	<i>ki</i>	<i>konai; koN</i>	<i>kuru; ku?</i>
Two Stems, 'do'	<i>si (si)</i>	<i>sinai (sinai); seN</i>	<i>suru; su?</i>

Table 6: The morphological schemes of the three verb forms

Ariake western Saga Dialect: The pair of the patterns of the adverbial forms and the negative forms alone CANNOT identify the derivational and inflectional class that their paradigms belong to in the Ariake western Saga dialect, either. If a negative form takes the pattern *seN*, then its adverbial form takes the pattern *si or se*. Then, their non-past forms will be *su?* of the paradigm of the multiple stem *s/se* verb and *su?* of the paradigm of the vowel /e/-final verb. The difference between the paradigms can be seen in the passive forms; *sareru* for the multiple stem *s/se* verb and *serareru* for the hypothetical 'vowel /e/-final' stem verb.

c. Pair of Adverbial Forms and Non-past Forms Alone as Predictor

The pair of the patterns of the adverbial forms and the non-past forms alone can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to both in the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect.

Tokyo Dialect: There are five possibilities in which an adverbial form takes two or more patterns: 1) *Xi* of the consonant-final stem paradigm and *Xi* of the vowel /i/-final stem paradigm, 2) *ki* of the consonant-final stem paradigm and *ki* of the multiple stem paradigm, 3) *si* of the consonant-final stem paradigm and *si* of the multiple stem paradigm, 4) *ki* of the vowel /i/-final stem paradigm and *ki* of the multiple stem paradigm, 5) *si* of the vowel /i/-final stem paradigm and *si* of the multiple stem paradigm.

- 1) If an adverbial form takes the patterns *Xi* of the consonant-final stem and

vowel /i/-final stem paradigms, their non-past forms will be **Xu** and **Xiru** in the Tokyo dialect. If the adverbial form takes the pattern **Xi** and the non-past form takes the pattern **Xu**, then the negative forms will uniquely be determined to take the pattern **Xanai** of the consonant-final stem paradigm. If the adverbial form takes the pattern **Xi** and the non-past form is **Xiru**, then the negative form is **Xinai** of the vowel-final stem paradigm.

Stem Type	Adverbial Forms	Non-past Forms	Negative Forms
C-Final	<i>Xi</i>	<i>Xu (X?)</i>	<i>Xanai; XaN</i>
Vowel /e/- Final	<i>Xe</i>	<i>Xeru; Xu?</i>	<i>Xenai; XeN, XeraN</i>
Vowel /i/- Final	<i>Xi</i>	<i>Xiru; Xi?</i>	<i>Xinai; XiN, XiraN</i>
Two Stems, 'come'	<i>Ki</i>	<i>kuru; ku?</i>	<i>Xonai; XoN</i>
Two Stems, 'do'	<i>Si</i>	<i>suru; su?</i>	<i>Xinai; XeN</i>

Table 7: The morphological schemes of the three verb forms

2) If an adverbial form takes the patterns **ki** of the multiple stem paradigm and **ki** of the consonant-final stem paradigm, the non-past form will be **kuru** of the multiple stem paradigm and **ku** of the consonant-final stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern **ki** and the non-past form takes the pattern **kuru**, then its negative form will uniquely be determined to take the pattern **konai** of the multiple stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern **ki** and the non-past form is **ku**, then the negative form will uniquely be determined to take the pattern **kanai** of the consonant-final stem paradigm.

3) If an adverbial form takes the patterns **si** of the multiple stem paradigm and **si** of the consonant-final stem paradigm, the non-past form will be **suru** of the multiple stem paradigm and **su** of the consonant-final stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern **si** and the non-past form takes the pattern **suru**, then its negative form will uniquely be determined to take the pattern **sinai** of the multiple stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern **si** and the non-past form is **su**, then the negative form will uniquely be determined to take the pattern **sanai** of the consonant-final stem

paradigm.

4) If an adverbial form takes the patterns *ki* of the multiple stem paradigm and *ki* of the vowel /i/-final stem paradigm, the non-past form will be *kuru* of the multiple stem paradigm and *kiru* of the vowel /i/-final stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern *ki* and the non-past form takes the pattern *kuru*, then its negative form will uniquely be determined to take the pattern *konai* of the multiple stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern *ki* and the non-past form is *kiru*, then the negative form will uniquely be determined to take the pattern *kinai* of the vowel /i/-final stem paradigm.

5) If an adverbial form takes the patterns *si* of the multiple stem paradigm and *si* of the vowel /i/-final stem paradigm, the non-past form will be *suru* of the multiple stem paradigm and *siru* of the vowel /i/-final stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern *si* and the non-past form takes the pattern *suru*, then its negative form will uniquely be determined to take the pattern *sinai* of the multiple stem paradigm. If an adverbial form takes the pattern *si* and the non-past form is *siru*, then the negative form will uniquely be determined to take the pattern *sinai* of the vowel /i/-final stem paradigm.

Ariake western Saga Dialect: Since the differences in the adverbial forms and the non-past forms are only that the non-past forms ending with *ru* in the Tokyo dialect whereas those non-past forms the same except for the glottal stop replacing the final *ru* in the Ariake western Saga dialect. The discussions for the Tokyo dialect hold true for the Ariake western Saga dialect.

In all the five cases for the two dialects, if a pair of an adverbial form and a non-past form is determined, then its adverbial form will be uniquely determined. The pairs of the patterns of the non-past forms and the negative forms thus identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to. From the discussions in 2.2.1 to 2.2.3, only the pair of the patterns of non-past forms and adverbial forms can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, i.e., be a predictor of the other verb forms both in the Tokyo dialect and in the Ariake western Saga dialect.

III. Rules in Word-based Morphology

We will summarize what we found in the previous section in rules of word-based theory. The derivational and inflectional classes are formulated in the corresponding schemes of the forms like $\{X_{i[Vform\ adverbial]}, Xu_{[Vform\ non-past]}, X_{anai}_{[Vform\ negative]}\}$ (or $\{(yomi, yomu, yomanaï), (kaki, kaku, kakanai), \dots\}$) for the paradigms of the verb forms of the

consonant-final stem verbs (Haspelmath and Sims 2010). As concluded in the previous section, what identifies the derivational and inflectional class that the paradigms belong to is the pair of the non-past forms and the adverbial forms. We can formulate the derivational and inflectional class of the consonant-final stem verbs as $\{Xi_{[Vform\ adverbial]} \& Xu_{[Vform\ non-past]} \rightarrow Xanai_{[Vform\ negative]}\}$ for the set of the paradigms. The derivational and inflectional class is $\{(Xi, Xu, Xanai) \mid Xi_{[Vform\ adverbial]} \& Xu_{[Vform\ non-past]} \rightarrow Xanai_{[Vform\ negative]}\}$. The formula says that if some segment sequence satisfies Xi for its adverbial form and Xu for its non-past form like *yom*, then its negative form will be predicted by plugging the sequence to derive the negative form, as in *yom* plugged in *Xanai* to derive *yomanai*.

The four derivational and inflectional classes with the predictors specified in the Tokyo dialect are formulated as follows.

Tokyo Dialect

[Vform <i>adverbial</i>]		[Vform <i>non-past</i>]		[Vform <i>negative</i>]
<i>Xi</i>	&	<i>Xu</i>	->	<i>Xanai</i>
<i>XV</i>	&	<i>XVru</i>	->	<i>XVnai</i> , where V = <i>e</i> or <i>i</i>
<i>ki</i>	&	<i>kuru</i>	->	<i>konai</i>
<i>si</i>	&	<i>suru</i>	->	<i>sinai</i>

Since the predictor defines the derivational and inflectional class, all the other forms are also uniquely determined. For example, the passive forms are those as appearing in each paradigm as follows.

[Vform <i>adverbial</i>]		[Vform <i>non-past</i>]		[Vform <i>passive</i>]
<i>Xi</i>	&	<i>Xu</i>	->	<i>Xareru</i>
<i>XV</i>	&	<i>XVru</i>	->	<i>XVrareru</i> , where V = <i>e</i> or <i>i</i>
<i>ki</i>	&	<i>kuru</i>	->	<i>korareru</i>
<i>si</i>	&	<i>suru</i>	->	<i>sareru</i>

The five paradigms with the predictors specified in the Ariake western Saga dialect are formulated as follows.

Ariake western Saga Dialect

[Vform <i>adverbial</i>]		[Vform <i>non-past</i>]		[Vform <i>negative</i>]
<i>Xi (Yri)</i>	&	<i>Xu (Y?)</i>	->	<i>XaN (YraN)</i>

<i>Xe</i>	&	<i>Xu?</i>	->	<i>XeN, XeraN</i>
<i>Xi</i>	&	<i>Xi?</i>	->	<i>XiN, XiraN</i>
<i>ki</i>	&	<i>ku?</i>	->	<i>koN</i>
<i>si</i>	&	<i>su?</i>	->	<i>seN</i>

[Vform <i>adverbial</i>]		[Vform <i>non-past</i>]		[Vform <i>passive</i>]
<i>Xi (Yri)</i>	&	<i>Xu (Y?)</i>	->	<i>Xaru?(Yraru?)</i>
<i>Xe</i>	&	<i>Xu?</i>	->	<i>Xeraru?</i>
<i>Xi</i>	&	<i>Xi?</i>	->	<i>Xiraru?</i>
<i>ki</i>	&	<i>ku?</i>	->	<i>koraru?</i>
<i>si</i>	&	<i>su?</i>	->	<i>saru?</i>

The analysis of the word-based morphology of the verb forms in the Japanese dialects provides an explanation to how children acquire various verb forms. The suggestion is that the children identify the derivational and inflectional class that the paradigm of the verb belongs to through being exposed to the non-past form and the adverbial form, and then derive the other verb forms applying the correspondence rules between word schemes. This helps the second language learners of Japanese to acquire how to create word forms of verbs, which is perplexing to the learners.

However, the word-based morphology does not explain why these correspondence rules hold between word schemes if there is any reason for the derivational and inflectional endings. Since Japanese is an agglutinative language, lexical stems affix to verbs to create the verb forms. That is, most of the derivational and inflectional endings are articulated from their stems. Morpheme-based morphology can capture it. The appendix provides Koga's (*in review*; 2010; 2011; 2012a; 2012b) on-going research of verb forms in the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect.

Conclusion

We observed the negative, non-past and adverbial of verbs in the Tokyo dialect and the Ariake western Saga dialect and the dialectal differences. We showed that no pattern of the verb forms alone can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to in the Tokyo dialect or in the Ariake western Saga dialect, and further that a pair of the patterns of the non-past forms and the adverbial forms can identify the derivational and inflectional class that the paradigms belong to, i.e., can be a predictor of the other verb forms in the two dialects. The conclusion suggests an explanation to why the children acquire the language in a relatively short period of time. There is no

explanation to the correspondences between word schemes. The current study implies that some pair of the patterns of two forms in the paradigm identify the derivational or inflectional class that the paradigms belongs to. Dialects share the morphological generative property on what form identifies the derivational and inflectional class that the paradigm belongs to.

Acknowledgements

The first author appreciates ERASMUS+ and Saga University for sending him to Vytautas Magnus University at Kaunas, Lithuania in March, 2019 and giving him an opportunity to teach Japanese classes and give a talk on the morphology and morpho-phonology of Saga dialects and Tokyo dialect. The current paper is a revised version of the manuscript that the author read in the talk. The author also thanks the comments and questions for the audience. All the shortcomings are ours.

References

- de Lacy, Paul. (2006) *Markedness: Reduction and preservation in phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. (2010). *Understanding Morphology*. 2nd edition. London: Hodder Education.
- Hayes, Bruce (1989) Compensatory lengthening in moraic phonology. *Linguistic Inquiry*, 20: 2, 253-306.
- Koga, Hiroki and Koji Ono. (2010) Surface constraints on multiple occurrences of the tense expletive. *Abstracts of International Workshop on Morphology and Formal Grammar*, Université Paris IV-Sorbonne, 36-40.
- 古賀弘毅 (2011) 『佐賀西部方言を科学しよう! : 言語理論入門』 名古屋: 三恵社
- Koga, Hiroki. (2012a) Past affix' selection of verbal stems. *Proceedings of the 19th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar*, 232-250, CSLI Publications, Stanford University, Stanford, CA, USA, downloadable at <http://web.stanford.edu/group/cslipublications/cslipublications/HPSG/2012/>
- Koga, Hiroki. (2012b). Verbal negative forms with the affix readjusted with the juncture consonant. 『第 145 回日本言語学会予行集』, 九州大学, 280-284.
- Koga, Hiroki. (*in review*) Compensatory geminate consonants in a Japanese dialect.
- Kubozono, Haruo (1995) *Gokeesee to on-inkoozoo* [*Word formation and phonological structures*]. Kuroshio: Tokyo.
- 九州方言学会編 (1969) 『九州方言の基礎的研究』 東京: 風間書房.
- McCarthy, John J. (2008) The gradual path to cluster simplification. *Phonology*, 25, 271-319.

London: Cambridge University Press.

McCarthy, John J. (2016) The theory and practice of Harmonic Serialism. In:

McCarthy, John J. and Joe Pater (eds.), (2016) *Harmonic Grammar and Harmonic Serialism*, 47-87. Equinox: London.

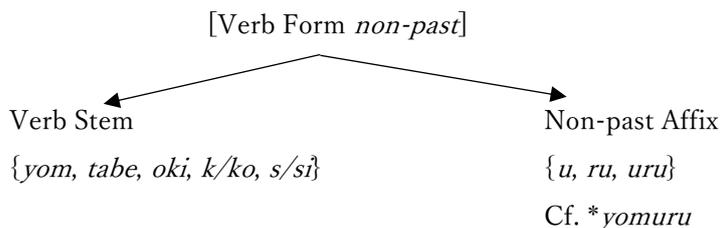
Yamada, Eiji (1990) Stress Assignment in Tokyo Japanese (2): Stress Shift and Stress in Suffixation. *Fukuoka Daigaku Jinbun Ronsoo* (Fukuoka University of Review of Literature & Humanities), 22, 95-154.

Appendix: Derivation of Verb Forms in Morpheme-based Morphology

Koga and Ono (2010), Koga (2011; 2012a; 2012b; *in review*) are the on-going research that attempt to explain the non-past or negative forms of the Saga dialects.

1 Tokyo Dialect

The non-past affix combines with a verb stem to form a non-past form of the verb, as the affixation represented below.

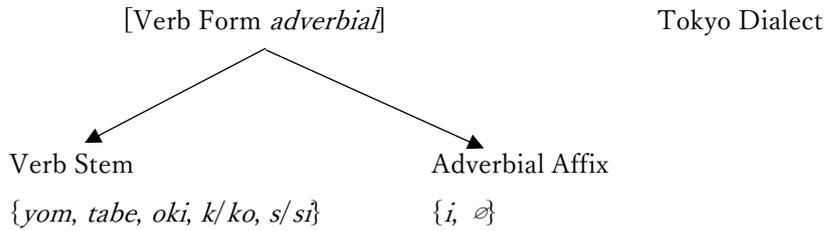


The relevant constraints given below on the non-past forms of the verbs are:

- 1) Syllables have onsets (McCarthy 2008).
- 2) The longest allomorph /uru/ will be used only if the stem consists only of one consonant (Koga and Ono 2010).
- 3) Words must be heavier than one heavy syllable (Koga and Ono 2010).
- 4) The non-past affix selects the shorter allomorph of the stem (Koga 2012a).

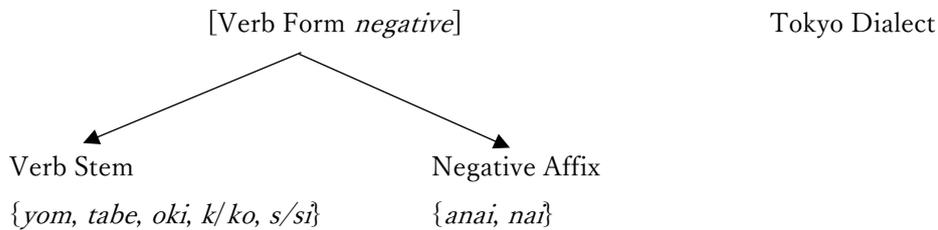
The longest allomorph *uru* is created by the two allomorphs *u* and *ru*. The second constraint is stipulative (although it predicts the ungrammaticality of, for example, **yomuru* `read-Non-past`).

The adverbial affix combines with a verb stem to produce an adverbial form. The allomorphs are *i* and the zero affix.



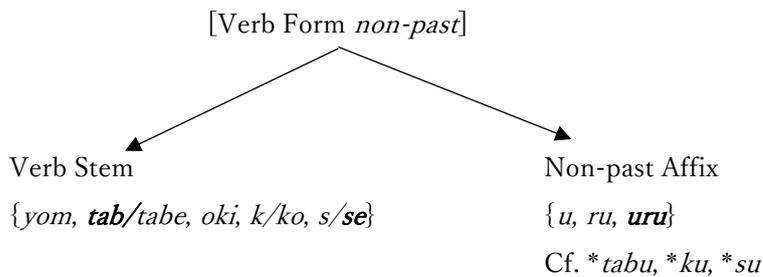
The adverbial affix selects the same allomorph of the stem as Koga's (2012a) core allomorph, which is the allomorph selected by the past affix.

The negative affix combines with a verb stem to produce a negative form.



The negative affix selects the longer allomorph of the stem (Koga 2012a).

2 Ariake Western Saga Dialect

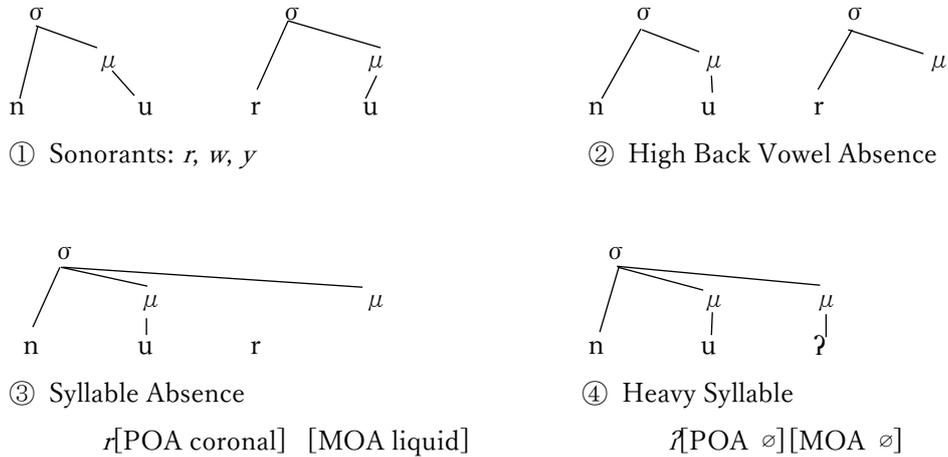


Koga (2012a) attributes the ungrammaticality of **tabu* to the ungrammaticality of **nu*, which is explained by i) the violation of the prosodic minimality and ii) classification of them in the same derivational and inflectional class.

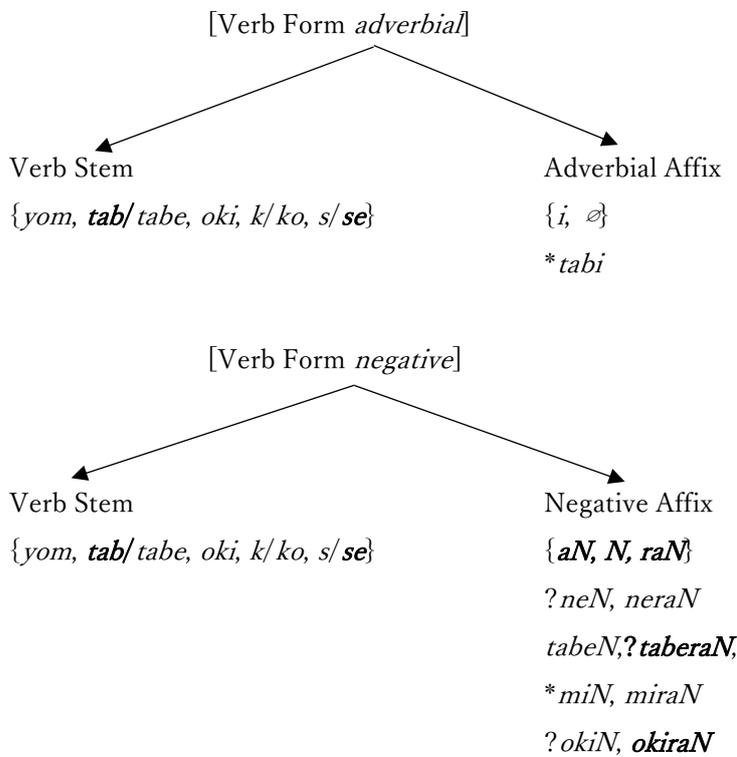
Underlying consecutive two light syllables [σ [C_1V_1] σ [C_2V_2]] may be pronounced as one heavy syllable with the last vowel unpronounced, σ [C_1V_1N] if $C_2 = n$ or σ [$C_1V_1?$] if $C_2 = r$, as pointed out by Kubozono (1995), if the onset of the second syllable is a sonorant, for example, /r/.

See Yamada (1990) for syllabification of words in Japanese.

Compensation with the glottal stop:



McCarthy (2008) explains the morpho-phonological differences adopting Hayes' (1989) syllable-moraic analysis.



The sonority difference between the nucleus and the coda must be bigger than that between *e*

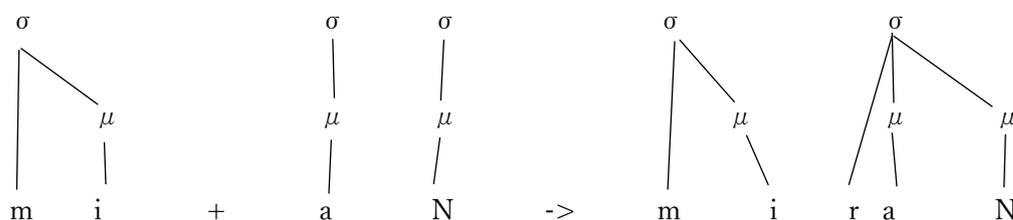
and *n* (Koga 2012b), as exemplified in [σ [a*N*], ?[σ [e*N*] and *[σ [i*N*]:

Words with [Vform *negative*] must be heavier than one heavy syllable (Koga 2012b). The allomorph *ran* as in *miraN*, *neN*, is used only if the forms with *aN* and *N* are both ungrammatical, as in **miN*.

Sonority Scale: $a > \{e, o\} > \{i, u\} > n$

See Hayes (1989) for the syllable structures with moraic ones.

See McCarthy (2016) for harmonic serialism in Optimality Theory.



Syllables have onsets.

Liquid Emergence (Koga 2012b)

Chinese Compounds: [hakka] for /hat_μ+ka/; [rakuteN] for /rak_μ+ten/

The POA dorsal is marked, and the POA coronal is not marked (De Lacy (2006)). The POA dorsal must be preserved. On the other hand, the POA coronal can be absent. See Koga (in review) for how De Lacy (2006) works in the non-consonant cluster simplification.

Notes

¹ The symbol ? is the glottal stop. There are phonological rules to have the effect of *ri* to *i* in the Ariake western Saga dialect, those to have the effect of *wu* to *u*, *tu* to *tsu*, *si* to *fi*, *wi* to *i*, *ti* to *fi*, *we* to *e*, *wo* to *o* in the Ariake western Saga dialect and the Tokyo dialect, and those to have the effect of some *ri* to *i* (e.g., *nasa(r)imasu*) in the Tokyo dialect.

	Tokyo Dialect			Ariake western Saga Dialect			
Stem	Non-	Adver-	Negative	Non-	Adver-	Negative	Mean
Final	past	bial		past	bial		-ing
Seg							

ment							
T	matu	mati	matanai	matu	mati	mataN	Wait
R	toru	tori	toranai	to?	tori/toi	toraN	Take
W	awu	awi	awanai	awu	awi	awaN	Meet
N	sinu	sini	sinanai	sinu	sini	sinaN	Die
M	yomu	yomi	yomanai	yomu	yomi	yomaN	Read
B	yobu	yobi	yobanai	yobu	yobi	yobaN	Call
K	oku	oki	okanai	oku	oki	okaN	Put
G	kagu	kagi	kaganai	kagu	kagi	kagaN	Smell
S	osu	osi	osanai	osu	osi	osaN	Push
E; E/N	neru	ne	nenai	nu?	ne	neraN/neN	Sleep
E; E/B	taberu	tabe	tabenai	tabu?	tabe	tabeN	Eat
l	miru	mi	minai	mi?	mi	miraN/ ?miN	Look at
l	okiru	oki	okinai	oki?	oki	okiraN/ okiN	Get up
K/O	kuru	ki	konai	ku?	ki	koN	Come
S/l; S/E	suru	si	sinai	su?	si	seN	Do

² See Haspelmath and Sims (2010), for example, p. 158 for motivations for paradigms in the architecture of grammar.

³ The negative morpheme of the Old Japanese is *nu*. The syllabic nasal N in the Ariake western Saga dialect seems to result from the apocope of *nu* and the preserved mora associating only with the nasal.

⁴ The honorific form does not allow the theme verb in the gerundive form to be equal to or less than one mora.

⁵ The symbols *X;Y* concerning data in the tables in the current paper means *X* in the Tokyo dialect and *Y* in the Ariake western Saga dialect.

⁶ If there were a pause between *a* and *ki*, then the last form might mean *ki`come'*. Then, *akuru* would be theoretically possible additionally.

⁷ The fact that the lexicon of the dialect does not possess the word is just accidental since the vowel /i/-final stem verb *kisiru` squeak'* exists, as given previously.

本号執筆者紹介

(50 音順)

木戸田 力 (かなざわ食マネジメント専門職大学 教授)

古賀 弘毅 (佐賀大学 准教授)

清水 恭彦 (かなざわ食マネジメント専門職大学 教授)

2025 年 3 月 発行

発行人 かなざわ食マネジメント専門職大学
〒924-0011 石川県白山市横江町 5250
